

NO. 54  
SUMMER  
1976

# 英語展望

ELEC BULLETIN

特集：異文化間

コミュニケーション (2)

文化の生態とその伝達——高橋源次

Cultural Patterns of Communication  
and Language Teaching——J. Condon



# 英語展望

NO. 54  
SUMMER  
1976

## ELEC BULLETIN

Edited by Fumio Nakajima  
The English Language Education Council, Inc.  
3-8, Jimbocho, Kanda, Chiyoda-ku, Tokyo



第2回キャラバンを了えて ..... 國弘正雄 2  
【国際展望】

星に想う ..... 吉田 正 7  
国際的視野 ..... 村田聖明 9

コトバとコミュニケーション ..... 寺石容一 11

【特集】異文化間コミュニケーション(2)

文化の生態とその伝達 ..... 高橋源次 13

Cultural Patterns of Communication and Language

Teaching ..... John C. Condon 18

バラッドの世界(その5) ..... 平野敬一 25

海外における子女の教育と言語 ..... 小池生夫 30

ポップ・ミュージックとマザー・グース ..... 中村 敬 35

英語の謡(その3) ..... 戸田 豊 38

【Forum】言語感覚教育について ..... 加藤淳一 41

森常治氏への反論 ..... 斎藤造酒雄 42

【新刊書評】『人類への一里塚』 ..... 小川芳男 43

『英語諺辞典』 ..... 戸田 豊 44

新刊紹介 ..... 45

新刊案内 ..... 47

展望通信 ..... 48

表紙デザイン

太田 英男

## 第2回キャラヴァンを了えて



KUNIHIRO MASAO

國 弘 正 雄

第2回キャラヴァンを了え、つい先月はじめに帰ってきたところである。言い出しちゃしては、まずはのでさであったことに心から満足している。多用中を時間をとってくれた小浪充東京外大助教授（国際関係論）と浅野輔国際商大教授（政治学）のお2人に深い謝意を表したい。とともに、この計画を組織面ならびに財政面でバックアップしてくれた日本国際交流センター代表の山本正氏と彼のスタッフ、吉田記念財団、アメリカ側のJapan Society、とくにマキャクロン専務理事らにもお礼を申し上げるものである。なかでも山本氏は、かつてラムスフェルト現国防長官が、フォード大統領に対し、戦後の日米交流にもっとも大きな寄与をした男として紹介したくらいで、そのアメリカサイドの人脈の幅と厚さは他に例をみない程だが、専心この計画の実施に合力してくれた。特記して感謝したい。

キャラヴァンの目的と成り立ちについては、すでに本誌でも書いたことがあるので、詳しく述べぬが、要は公職にないわれわれ年代の若い日本人が、通訳という手続を介在させずに、直接、英語を用いて、各界各層のアメリカ人と、歯に衣着せぬ対話をくりひろげることにある。In-depth dialogue というのがわれわれの好んで用いたことばであった。

従来の日米交流がとかくオエラ方同士の、したがってキレイゴトに終始しがちなそれであること、また、どれほど技術的に進歩したとはいえ、しゃせんは隔靴搔痒の感を免れがたい通訳に依存しがちであったこと、の欠陥を痛いほど感じてきたわれわれとしては、何とかしてお互いの考え方や問題意識をナマの形でぶつけあい、市民レベルでの対話を深めたいと願っていたのである。

とくに一見、日米間の二国的な関係では、とり立てて大きな問題や係争点もないままに、微調整——fine-tuning と英語ではいう——だけが必要、という安易な感情が太平洋の双方に一般的であったことを、われわれは心安からざる想いで見守っていたのである。日本とアメリカのように、さまざまな面において異なる2国が、はた

してそんなに簡単に微調整などといえるものだろうか、という疑問がわれわれにはあった。テレビ技術の専門家にいわせると、微調整ぐらい、ほんとうは難しい作業はないらしい。テレビでそうだとすれば、ましてや2つの異なる文化の間では困難は数倍にも上ろうと、流行語化したことばを恨めしく目にし、耳にしていたものだった。

はたせるかな、ロッキード事件が突如として——ただしその根は深く、持ち上るべくして持ち上ったという感が深いのだが——炸烈した。われわれが日本を発つちょうどひと月前のことだった。日本の政界は震撼し、社会全体も揺れに揺れた。そしてその余波は、いまなお収まつおらず、由々しい事態の生起すら予想される。Fine-tuning 論がどれほどあさはかな自己満足にすぎなかつたかをいやというほど教えられ、覚悟も新たに、やや大げさにいうなら、まじりを決する思いでわれわれは日本を後にした。児玉のやしきに軽飛行機がとびおり、町往く人やタクシーの運転手さんまでが、日本人とみると“Kamikaze”という英語化した日本語を口にし、アメリカ国内情勢に関する新聞漫画に、特攻隊スタイルの飛行機に搭乗したキッシンジャーやフォードが出るようになったのは、ちょうどわれわれが、アメリカ大陸のどまんなかの、ミズーリ州はキャンサス・シティにいるときのことだった。

ただロッキード事件というのは、淵源するところは深く長く、われわれの目的や講演内容に根底においてはしっかりと連なっているとはいえ、第2回キャラヴァンとしては文字どおりの飛び込み的な事件であった。事件発生以前にわれわれが調査をもくろんでいたのは、次の数点だった。

第1に、ことしはアメリカ建国2百年である。ヴェトナムとウォーターゲートという彼らにとってまさに戦夢にひとしい内憂外患を経て、いまアメリカ人が、一体どのような感懷で独立2百年を迎え、具体的になにをし

ようとしているのかを実感したかったことである。ある種のカタルシスを経た彼らの中に、たとえば対外関係においてなんらかの新しい胎動がみられるかどうかを、われわれは一つの重大な課題とした。

第2に、ことは大統領選挙の年である。すでにいくつかの州での予備選挙は旬日の間にせまっていた。歴史はじまって以来、はじめての選挙によらない大統領が、そのかなえの軽重を問われる場でもある。その結果はどうなるかは、われわれにとっても関心事たらざるを得ない。大統領選挙の経緯や帰趨に、アメリカの対外姿勢——国内情勢を映す鏡としてのそれ——の変化の兆と、その大まかな方向とを探りたいと願うのは当然だった。

第3に、これは私個人の強い願望だったのだが、第1第2の点とも関連して、代議制民主主義の将来の明暗を、アメリカの現状において探りたい、という野心が横たわっていた。西欧型の代議制民主主義の後退が世界大で顕在化し、その governability——私は、自己管理能力と訳してきたが、この問題の専門家で上智大学の綿貫讓治教授のお墨付き（？）を得て、いまでは安心してこの少數説を使っている——の消失現象があらわになりつつあるときだけに、民主主義と自己管理能力、いいかえるなら自由と責任、ないしは妥当性(legitimacy)と有効性(effectiveness)との間に本来的に存在する二律背反的な緊張関係が、市井のアメリカ人や有識の士によってどのように受けとめられ、融合されようとしているのかは、私の少なからぬ関心をひく主題だったのである。

第4の目的は、なんといってもアメリカ経済の実体だった。インフレと不況が共存し、ブレーキを引きながら同時にアクセルを踏み、しかも車をこわしてはならないという、いわゆるstagflation(stagflation)なる未曾有の難題を前にして、どのような経済運営を行なわれようとしているのか、また経済、とくに景気の状態はどうなっているのか、英語的ないい方をするなら、いったいアメリカ経済は森を出ようとしているのか、出たのか(out of the woods)を、単に経済専門家や政府要路の人々の口からだけでなく、かつてあの国に10年近くを過したものとして、生活実感レベルで感じとってきたい、というのが私の希望だった。七面倒くさい統計数字や、こちたき経済理論には不案内でも、スーパーマーケットでプッシュ・カートを押して何がしかの品物を購ない、ふらりと街の食堂に入ってはだれがなにをいくら払って喫しているかを見聞してくれれば、経済の実体が多少は感得されよう。

アメリカ経済がくしゃみをすれば日本経済は風邪をひ

き、アメリカ経済が風邪をひけば、日本経済は肺炎にかかる、というのはいさか昔なしに化ったとはいえ、また、日本の対米貿易率がかつての30%強から18%内外に減じたとはいい条、アメリカに本拠をもつ多国籍企業の巨大な影響力を思い、エネルギー面での絶対的なアメリカの優位に想到すれば、これはひとごとではありえない。げんに、日本人がどうやら不況感を脱し、景気上昇のけはいを覚えつつあるのも、対米輸出の好調に由来するところが勘なくない。本当にアメリカ経済が森に出たのか、それとも大統領選挙を控えての人為的なてこ入れの結果にすぎぬのかは、したがってわれわれの関心事たらざるを得ぬ。

さいごに、ワシントン大学、ミズーリ大学、ネブラスカ大学、ミネソタ大学、それにニューヨークでのコロンビア大学の訪問を通じアメリカの高等教育の現状に親しく接したい、という願いはわれわれ3人に共通だった。たまたまお互いが大学に席をおくという以外にも、アメリカにおける研究開発の実体に触れ、情報革命にどう対応しようとしているかは、日本の将来を考える際にも大きな指針となる。日本も早晚、いわゆる知識集約度の高い社会経済形態への移行をせまられるることは必至であり、研究開発、いわゆる R & D——research and development の略——と、その基層に存在する教育とは重大な関連を有する。

さまざまな内的外的な理由から、モノよりも頭を使って生きていかねばならぬのが日本である。にもかかわらず、日本の実体は満足というのからほど遠い。この辺のアメリカの実情はどうなっているかを知ることは、われわれにとっては緊急な作業に属する。日本の事情を知らせることに力点をおきつつ、あわせてアメリカの実情をみきわめてきたいと思うのも故のことではなかった。

事実、この姿勢は今回のキャラヴァンの基調をなしていた。その点、前回、つまりは一昨年秋のキャラヴァンが、日本についての解説——全国ネットのテレビ出演を含め各種の public appearance は25回にも上った——に重点をおいたのとは、いさか趣きを異にしていたのである。

以下、上述した目的意識にそって、どのような知見と感想を得たかを、できるだけ具体的に述べてみたいが、どのような itinerary に随っての旅であったかを時間の経過を追って記していくのが穩当かつ便利かと思われる。

まずさいしょに足跡を印したのは、北東部、英語にい

わゆる Pacific Northwest のシアトルで、総領事館で饗應にあづかったあと、州立大学で主として東アジア関係の専門家数名と懇談、談はアメリカ大統領選挙からその帰趨を決定する経済のゆくえに及び、他方、向うからは日本の政治や経済がいま大きなギアの入れ換え期にあるのではないかという質問が、それぞれの専門家から發せられた、ついで同じシアトルのバッテル研究所を訪れた。アメリカにはこの種の民間研究所が少なくなく、その多くは元来が自然科学や工学関係の研究を目途としていたにもかかわらず、その後は社会・行動科学に守備範囲を拡大、いまでは国内的な関心から、国際的な拡がりをみせつつある。

ゼロックスの発明家の手になるものだけあって、広大な敷地には池あり小山あり、みわたすかぎり芝生がひろがったさきには瀟灑な cottage 風の宿泊施設と研究室とが立ち並んでいる。どの研究者にも、いかにもてきぱきと心利いたる風情の秘書嬢が配せられてあるのが美しい。電話とりから来書の整理まで、みな一人で手がけねばならぬお互いにとて、アメリカのもつ下部構造の充実ぶりが、である。あれだけの能率をあげようとすれば、その裾野はどうしても広くなければならず、英語にいわゆる supporting service の整備が欠かせないのであろう。

シアトルに2泊ののち、われわれはミズーリ市のカンサス・シティに向った。ここはちょうどアメリカのどまんなかに位置し、アメリカ有数の農業州である。どうしたわけかここには日本協会の支部があり、その活動の活発さで知られており、それがここに杖を曳いた一つの理由だったが、ここを含め、ネブラスカ、ミネソタと中西部を中心に歩をすすめたのは、アメリカの農産物への依存度が高い——高すぎる(?)——という事実があるからである。大豆や小麦、それに飼料穀物などでは、その対米依存度は實に全体の輸入量の9割近くにも上っている。

はたせるかな、ここの大学での講演中に、1人の農業関係者とおぼしき、日焼けして頑健そのものの中年男性が、日本は数年前のニクソンによる大豆禁輸に腹を立て、ブラジルにその供給先を移そうとしていると聞くが事実かどうかを、苦渋にみちた面持で控え目に訊ねられ、こっちの方が面喰ったほどであった。この問いには、農業関係に比較的くわしい(!) 私が当ったが、その意外性におどろくと同時にかつては孤立主義の牙城と自他ともにみなしてきた中西部農民が、明らかに「国際化」した意識を自分の生業との関連において芽生えさせつつあることに思いいしたり、時勢の移り変わりを痛感し

たものである。

そういうば、例の共和党のリーガン前知事が、大統領選候補者としてロスアンゼルスで、ソ連のアンゴラその他への進出をはげしく非難し、ソ連による大量の小麦買いつけをとめるべきだとタカ派ぶりをいかんなく發揮した折に、時をうつさず同候補を手書きびしく論難し、われわれの生活権を奪うのかと声をあげたのは、ほかならぬ中西部の農民団体であった。

一方において食料や農産物を石油に対抗する武器として使い、全世界の農産物の1割を生産し、世界大での輸出入取り引きの3割を占めるアメリカの優位を生かすべきだという主張があり、あわせて、ソ連とのいわゆる detente の崩壊が噂され、デタント外交の推進者であったキッシンジャー長官の進退が関心をひいている今日のアメリカで、他方では、ソ連への小麦の売却にその經濟的安寧と福祉を賭けた多くの農民があり、政治的勢力として重きをなしているのである。リーガンがにわかに発言を撤回したこととはいうまでもない。近代国家の諸集団のもつ利害の錯雜さ、なかんづくアメリカの有するめぐるめくまでの多様性をこの挿話はうらがきしている。

と同時に、近代国家が、少なくとも為政者の立場からするなら、どれほど ungovernable なものに化ったかをも物語っているといえよう。それぞれの異なる利害集団が最大限にその利害の伸張をはかることが是とされるのが近代民主主義の基本的な前提とするなら、その利害間の衝突は避けられるはずとてなく、政治や行政のできることといっては、足していくつかで割るという弥縫策以上のものではない。近代国家がいま一様にかかえている ungovernability の原因も、一つにはこの点、すなわち前述の自由と責任、妥当性と有効性が内蔵する二律背反性に求められるといえるであろう。アメリカもまたその例に洩れないるのである。

カンサス・シティで数日を過し、さいきんその実直さと謙虚さとの故にとみに声価の上っているトルーマンの終えんの地、インディベンデンスを再訪ののち、われわれは隣州ネブラスカはリンカンに飛んだ。州立大学の所在地であるとともに、例のアイルランド系聖職者フランガン神父の「少年の町」でもしられる。折しもアイルランドの守護神、聖パトリックの祝祭日とて、グリーンのスーツを一着に及び、グリーンの洋傘を頭上にかかげ、小犬にまでグリーンを着せた婦人が、同じくネクタイからシャツまでを一色できめた男性と三々五々していた。アイルランド系以外も、ご祝儀とでもいうのか、この日ばかりはグリーンの配色に気をくばるといわれている

が、ここにアメリカがフルーツ・ケーキ、ないしは tossed salad になぞらえられる理由があるのであろう。人種民族のるつぼ (melting pot) というと、とかくすべてが鑄溶かされたという響きが強いが、構成要素がそれぞれその特異性を残しながら、一つの共通の味つけを受けている複合国家、という風趣がアメリカにはまつわりついている。ここにあの国のもつ機会と限界、可能性と困難とが胚胎するのであろう。

いまを去る 2 百年の昔、彼らの父祖が新大陸にやってきたのは、人類の到達しうる極限的な理想を具現化するためであった。いわく自由と平等、いわく法の前の一視同仁、いわく人種民族信条の差異を超えた和解と融合。それは、人間実存、ないしは宗教の次元においてはまさに「自明の理」であり、普遍的な真実であるとしても、これを政治や行政や社会体制というレベルで現実化しようとなれば、ほとんど実現不可能に近い。人類は当時はもちろん、いまなおその高みに達してはおらず、恐らくは未来永劫、その域に至ることはあるまい。

しかし彼らは、その不可能な夢に国造りの基礎を据えようとした。そしてやはり、多くの困難に逢着せざるを得なかつたし、いまなおしつつある。人種問題、なかでも黒人やプエルトリコ系、インディアン、東洋人などが今日なお体験しつつあるいたつきは、究局的にはこの事実、すなわち、不可能を現実次元で具現化しようとした点に求められるべきであろうし、そう考えれば、彼らがしばしば多大の感懷をもって口にする「はるけくも来にけるものかな」という想いは、必ずしも独りよがりな自己満足とばかりはいえないようと思われる。ベトナムやウォーターゲートの悪夢もまだ生々しいこの年に、はるかに 2 百年前の往時を偲ぶアメリカ人が、原点への回帰を切ない思いで志していると私には映る。そしてアメリカ人の國際感覚や対外観を、より成熟したものへと化しつつあるかのごとくである。近い過去のすぎゆきへの反省とともにである。

リソカソの空港にヴァーナー州立大学総長とプレッシュ副学長が出迎えてくれたのには恐縮一方だった。自ら車を駆っており、荷物はこびや、ポーターへの心使いまで気さくに手伝ってくれる。彼らの厚意は数日間のリソカソ滞在中、終始かわらなかった。日曜を割いて 150 マイルほど離れた農場を訪れた際には、数人のりのセスナ機に搭乗、せっかくの休日と一緒に過してくれた。数百頭をこえる牛の放牧場や地平線の彼方まで拡がるかにみえる小麦畑を先頭に立って案内してくれたのも総長先生だった。

ただ何よりもわれわれを驚かせ、悲しみをも強いたのは、州立大学の図書館設備のあきれるほどの充実ぶりと、情報・資料検索施設のみごとさだった。

もとよりネブラスカ州立大学は、ハーヴァードやアイエルではない。元來の出自は、農民に実用的な農業技術と機械土木を教授することを目的として発布されたモリル法に基づく、いわゆる土地付加大学 (land-grant college) であり、東部インテリが cow college と蔑称する地方大学にすぎない。ところがこの「牛の大学」にしてなお、あれだけの設備を誇るのである。

学内の教育テレビ局がまずわれわれ 3 人をびっくりさせる。何れも NHK 教育テレビと因縁浅からざる 3 人だけに、あの設備がただならぬものであることは、直ちに納得された。でも図書館設備の豪富とでも形容したくなるほどの、ゆったりとした充実ぶりには圧倒され、身がぢぢむ思いだった。単に建て舎が広大で、蔵書数が多いというだけではないのである。使用者のためのラウンジや付帯設備が實にふんだんにしつらえられてるのである。豪富と形容したのはそのためである。大らかなゆとり、といってもよい。

コンピューターが有効に使われ、しかも他の近辺の図書館と有機的にリンクされているのも驚きを強要した。君に関連のある英文の本があるか、と担当の技術者——司書というのか——が訊く。Discord in the Pacific という書名をいう。拙論が含まれている一種の啓蒙的学術書である。

そこで彼は、DITP という書名のイニシャルをタイプライター状のキーでパンチする。するとわずか数秒で、目の前のパネル式のスクリーンに、DITP というイニシャルをもつ書名の本が print out されて出てくる。その数の多さにも一驚したが、相互援助とり決めをしている図書館のどこになにが所蔵されてあるかが文字どおり一目瞭然なのである。

ついで彼は Discord in the Pacific を特定するためまたパンチする。すると、その本の所在とくわしい内容が、またたく間に print out されて出てくる。私の論文名と梗概を含めてである。いや全くびっくりした。

かねてからアメリカの図書館のもつ reference service には驚歎していた。何かテーマを呈示すれば、その主題に関する文献が論文やモノグラフのたぐいまで、きちんとリストアップされて提供されるからである。われわれが手工業よろしく一冊一冊を漁り歩くときに、彼らは一発で用が足りる。われわれが論文や本を執筆するときには味わう肉体的な労苦は彼らのものではない。それがコンピューターの到来とともに、このような形で集大成

され、機能的かつ迅速な検索を可能にしている。

コムピューターが日本では給料計算に活用されているのは、給料計算という実体が既存していたからである。アメリカでこのような形で資料検索が容易になってるのは、カード形式での情報の収集がすでに実行なわれていたからである。残念ながらアメリカと比べ、日本のこの分野での立ち遅れは覆いがたい。モノではなく頭を使った知識集約型経済社会の移行の必要が説かれて久しいが、それに必要な条件の整備が、少なくとも大学などの公的機関に関するかぎり、日本では完全に欠落しているのではないか、という思いを強くしたことだった。

むろん、三井物産とか三菱商事とかいう営利企業にはあの程度の設備は、収集と検索の両面にわたって存在するであろう。なんといっても彼らは世界に冠たる一大情報網を形成しているからである。

だが、とわれわれは思った。彼らのもつ設備は、一企業の利益追及のために、いわば閉ざされた形でしか存在しない。公的セクターで、公開された形でだれでも自由に入手できるというのではない。この差異は、情報革命以後のアメリカと、それ以前の日本という単純な図式では割り切れない複雑な字余り的懐懃をわれわれに強いのだった。同じ R & D といっても、日本の場合は公私との比率が 3:7 で、諸外国と較べて公的セクターの占めるパーセントがあまりにも高すぎ、基礎研究 (basic research) がおそらくにされ、商品関連 (product-related) の応用研究 (applied research) に重点がおかれていることの問題点があらためて想起された。たとえば石油代替エネルギーの開発が、民間による応用研究で可能な筈はありうべくもないからである。

その後われわれはミネソタ大学での 9 時から 5 時までのセミナーを了え、ニューヨークについた。コロンビア大学でのモーリー、バッシン、ブレイカーなど、名だたる日本専門家との熱っぽいやりとり、日本協会で並入る経済界のお歴々——司会者はタイムライフ社のリネン会長——を前にしての講演、それに、外交問題評議会での「1980 年代の日本の将来」プロジェクトについての話しあいなど、さすがに一番骨っぽい、中味の濃い数日だった。ここの OK が出ないと国務長官の人事も決まらないといわれるほどの影響力をもつ同評議会のマニング会長との私的な会話も、アメリカの対外姿勢の将来をトする上にまことに有益だった。

くち惜しいかぎりながら、その詳細について語る紙幅は許されていない。したがって残された余白で、ごく簡単にアメリカの対外態度の内的な変化の方向を録してお

くにとどめよう。

一つは前述した対ソ硬硬世論の台頭にもかかわらず、そしてその路線が大統領選の結果いかんによってはさらに表面化する可能性が皆無とはいえないまでも、アメリカがかつてのかたくなな反共姿勢から解き放たれつつあるらしい、という点である。そこに私はベトナムの苦い体験の好もししい形での超克の努力を垣間みる。

次は、たとえば日本についていうなら、今まで、いかがわしいグループと、反共を呼号するだけの理由で、ときとしてはお神酒どっくりの、さもないときでも心情的な共感の関係をとり結んできたことへの反省がみられるようになった、という点である。児玉とロッキードとの関係に象徴的に示されたこの関係の忌わしさが、彼らを醒めさせた、といってはいいすぎだろうが、われわれは wrong people と深入りしすぎたという思いは、かなりの知日派人士に共通だった。この契機を促進したのが児玉であったとしたら、はからずも有用な役割を演じたことになる。

そしてこのことは、より身ぎれいで、政策志向的にもリベラルなグループと突っこんだ話しあいを、単に二国間の問題だけでなく、多国間的なわくぐみの中で深化していくべきだという思いに連なり、他方、マニング会長やマキャクロン博士らのように、日本は憲法九条の精神を守りぬき活かしつづけることで、moral leadership を發揮してほしいという願望を公言する有力者があらわれはじめたことにも通じていく。リベラルで重武装を選ばない日本こそが、全体主義への傾斜を避け、アジアにおける安定勢力として世界に寄与しうるのみか、必然的不可避的に予想される日本の国内政治や経済のギアティングを、スムーズに行ないうる、という認識に根ざしてのことであった。

(なおこの点については、建国 2 百年への祝意を表しつつ、日米関係の歴史を回顧し、戦後のアメリカの対日観のあやまりを指摘した小論(英文)を用意し、各界のアメリカ人に手渡してきた。同論文は 7 月号の英文 PHP 誌に掲載が予定されている。“Who Are America's Real Friends?” というのがそのタイトルで、アメリカが非民主的な勢力を友人と思いこんできたことの錯覚を衝いたものである。それだけに彼らの覚醒を私は多とした)。

この認識は恐らくは正しいであろう。そして何たる成熟、何たる深化と彼らの日本観、日米関係観のさまがわりに嬉しい驚きを覚えたことを告白する。その上われわれのささやかな努力が些かなりと寄与できたとすれば、満足これにすぎるものはない。(国際商科大学教授)

## 星に想う

YOSHIDA TADASHI

吉田 正

## 1980年代には

ちかごろは星の見える夜が多くなった。今年の七夕は晴れるだろうか。天の川を渡って年に一度デートする星の恋の物語は、古代人の描いた美しいロマンだが、現代の星空には、より大きな夢がひろがっている。すべるようく飛ぶあの星を、ごらんになった方があるだろうか。あの人工の星の話である。

「気象衛星ノア」からの写真が、テレビの天気予報にはよく出るようになった。海外の big event は、“Via (by) Satellite”，衛星中継で茶の間のテレビに映るし、国際電話も、海底ケーブルによるほか衛星経由が増えている。これらは通信衛星の働きだが、このほかに、資源探査衛星だとか、放送衛星とか、各種の衛星が、現実に活動したまは計画されている。

日本で実験用の放送衛星が打上げられるのは、1978年の予定だが、この星が上がると、星からの画像と音声が、直接家庭のテレビ受信機に出ることになる。これを直接衛星放送と呼んでいるが、これが実現すれば、海外からのテレビ番組がそのまま家庭でキャッチ出来ることになる。技術的にはすでに可能で、実現は、1980年代と予測されている。世界のテレビの好きなチャンネルを自由に選べたら、さぞ愉快だろうが問題はそう簡単ではない。まず言葉の問題がある。それに情報の自由とバランスの問題が、東と西、南と北の間に、大きな障害となっている。

この直接衛星放送という技術の革新を、世界のコミュニケーションの飛躍的向上のため利用しようと、数年前からユネスコ・国連、それに各地域の放送連合は検討を進めてきたが、基本的な原則についてさえ、完全な同意には到達していない。わたしも、この問題を討議するユネスコの専門家会議の議長をつとめたことがあったが、意見の対立はすさまじく、ののしりあいまで出る始末で困惑した記憶がある。その対立を俗な言い方で要約すると、次のようなことになろう——

西欧諸国は、概して情報の自由な交流を支持する立場

にあり、米国がその急先鋒に立っていた。これに対し、東欧諸国と途上国の多くは、強いもの勝ちの情報の自由な侵入は困るという主張で、情報の自由にいろいろな制約をつけようとする。例えば、ポルノが勝手に家庭に入ってきたは困るし、商業主義の番組、その国の政治・経済を混乱させる結果になるような番組も許容しがたい。それで、外国で受信する番組の内容については、発信国の政府にその責任をとらせようとする。これに対し、情報の自由を標榜する諸国は、それは番組内容への政府の介入をまねく怖れありとして、拒否するといった具合だ。しかしこの難問も国連での会議を重ねるにつれて、歩みよりが見え始めてきたので、いかなる型でか直接衛星放送の時代は近づきつつあるのである。

最近は、若者たちのあいだでは、short wave による国際放送を聴くことが、一種のブームになりつつあるという。しかしテレビの国際放送の魅力はその比ではなかろう。いまから、星からのテレビを充分楽しめるよう、ヒアリングの練習をしておきたいものだ…いやそれより、地球が直接衛星放送でおおわれるようになれば、コミュニケーションの上で、地球は今よりずっと小さくなってしまう。その小さな地球の小さな島のことばだけで、どうしてこれから国際化時代を、充分にエンジョイし、また活躍できるだろうか。

## 情報のアンバランス

E.O.ライシャワー教授が、日米文化教育会議の席上、両国の翻訳書の交流について、米国対日本の割合は 200 対 1 であると指摘されたことがある。なんとかこの現状を改善しなければ、相互理解はむづかしいというのである。放送・映画など他のメディアについても同様のことが言えよう。そしてこのアンバランスは、日米間のみのことではなく世界的にあるのである。

フィンランドのタンペレ大学が、ユネスコの協力で、世界のテレビ番組の制作と交流の情報を調査したものがあるが、国によってはその番組のほとんどを、輸入番組に依存している途上国もある。輸出の最大手は米国で、

それに西欧諸国がつづいている。一方全放送番組に対し、輸入番組の比率の少ない国をあげると、大国に多く、中国1%，米国の商業放送1%，公共放送2%，モスクワ第1チャンネル5%で、日本では、NHK総合4%，民放10%となっている。

アジアの他の国々の情況をみると、およそ20%から75%を輸入番組で埋めている。それらの輸入番組が、どこかの国から来ているかをしらべてみると、約50%は米国から、25%は英国から、そして残りの25%が独・仏・日などからとなっている。つまり、輸入番組の75%は、英語の番組なのである。しかも国によっては、その番組を、自國語に吹きかえもスーパーもせずにそのまま流している。子供たちは、ことばはひととも分らなくても、絵が動くのにひかれて、じぶんたちの暮らしとはおよそ関係のない、外国のドラマをまじまじと見ている。

テレビが各国に導入され、空には通信衛星が上り、いろいろとメディアが開発されてゆくことは、それぞれの国の国内の情報が自由に衆知され、また国際間では、お互いによりよく理解しあうために利用されるべきものが、一方的に、ある国的情報なり文化がおしよせて、自國の伝統や文化を破壊する危険さえはらんでいる。こうした傾向に、途上国は警戒し、反発するとともに、自分たちの声をもっと他の国々に聞かせたい、という願望が出てくるのも、当然のことであろう。

ところで経済大国日本の場合は、その製品が世界のすみずみにまで輸出されているのにくらべ、日本からの情報は、ほとんど何もつたわっていないというのが現状であろう。こうした日本を「啞の巨人」にたとえたひとがいるが、何かそんな不気味な印象を海外にあたえていることが、児玉善士夫宅への特攻機突入事件を、世界の各國が異状な関心をもって報道した背景にあるとしたら、将来の日本にとってまことに残念なことである。もっと、われわれはただの人として、海外の人々とより積極的に接し、友だちになってゆかなければならぬ。

先頃上智大学で名誉文学博士号を贈られた国際文化会館理事長の松本重治氏は、文化交流の基本は、人ととの交流と話し合いであるとの信念を語られたが、それは「太平洋の水を茶碗でかい出すようなものだ」と、友人にいわれたこともあったと回顧されていた。それはたしかに大変困難なことではあろうが、これから日本人の忘れてはならないことだろう。そしてそれには、まず話しあえることばを知らなければならない。読むだけでなく、ぜひ話せるようになりたいものだ。

## あーんちゅ

小学1年の娘をかしらに、3人の子をつれてロンドンに赴任したときは、面くらうことばかりだった。3歳の子が「アーンチャン」で何のことかといふ。「兄ちゃん」？ 家内によく聞いてみると、家政婦のおばさんがその子に、「You are good boy アーンチャン」とよく言うのだといふ。 “aren't you?” のことを、子供はアーンチャンでおぼえてしまったのである。

ことばが通じないのであるから、子供は幼稚園にも学校にも行きたがらない。そのうち男の子は Yes と No をおぼえた。それをかわりばんこに言つていれば、よいのだということを発見した。上の娘は入学1週間くらいで、クラスメイトから誕生日会への招待状がとどいた。小さなプレゼントをかかえて出かけた彼女は、幸福そうなバラ色の顔で戻ってきた。友だちが出来たのである。誕生日会はちょくちょくあった。わが家でもお友だちを招いた。こうして子供たちの英語は急速に上達し、幸せな生活が始まったのである。

友だちが出来ること——話しかけたいことがあること——これが英語上達の基本であろう。恋人ならさらに効果的かも知れない。ペンフレンドが出来ることも同じであろう。文法を気にして、しかも話しかけたい、相手がなければことばの勉強は命を失ってしまう。

もう一つ、ロンドンで痛感したことは、幼児のことばをおぼえる速さである。日本の子供は6歳ぐらいまでに、約2000のことばを習得するという。0歳から6歳までが、ことばをマスターする能力が急カーブで上昇する時である。それを、この時期にはほおっておいて、中学に入ってからつめこみの英語教育が始まるのである。もったいないことだ。

幼児に英語を教えるというと、かわいそうだと考える親がいる。しかし最近の脳生理学は、脳がそんな重箱みたいなものでないことを明らかにしている。われわれの脳には、まだ使われずに終わっている部分がたくさんあるという。小さな渡り鳥でさえ、1万キロの行程を年に往復するという。人間の能力も、その成長の最盛期である幼児期によい環境をあたえて開発すれば、おどろくべき成果があがるのである。あそびながら、幼児が、英語を日本語といっしょにおぼえられたら、bilingual な時代の到来も期待できるのであるまいか。

(ソニー株式会社理事)

\* \* \*

## 国際的視野

MURATA KIYOAKI

村田聖明

私の職場は英字新聞社なので、当然ながら海外からの手紙を受けとることが多い。そこで気づくことだが、英米人がとかく、自分の住所に、自分の國の名前を書き入れることを忘れる、ということだ。

「忘れる」というのは、あるいは善意の解釈で、書く必要がないと思って書かない場合が多いのかも知れない。

それが、London や New York なら、許されてもよいが、Birmingham や Cambridge や Oxford となると、これは、イギリスにもあれば、アメリカにもあるという地名である。何國の何州の何市である、といわずにすむと思うのがどうかしているのである。

要するに、これは、人間誰でもが持っている傾向の一つ、空間的な意味での自己中心主義の現れである、といえよう。

何世紀も以前の人間が、自分の住む所こそ地球の中心である、と考えて、且つ行動したからこそ、Mediterranean Sea (地中海) や「中国」という地名が生まれて来たのである。

それにしても、これほど教育が普及して、全地球的通信、交通機関が発達した時代においても、なお、自國が世界の中心であるかの如く考え、振舞うのは、要するにその人間が無知であるとしか言えないような気がする。

自國中心主義は住所だけではなく、もう一つ面白い所に現われる。それは、アメリカやイギリスから、何かを照会してくる時、返信用に、自國の郵便切手を同封してくる人がある、ということだ。あるアメリカ人が、日本の東京の新聞社に手紙を出して、ある事柄について返事を求める。その時に、アメリカの切手を同封して、相手がその切手を手紙に貼って東京の郵便局に出て、それが通用するものだ、と信じ込んでいる、ということは、われわれには理解しにくいことである。

では、日本人はどうなのか。われわれは、英語国人とは反対に、むしろ、他國中心主義的に振舞っている、といえるかも知れない。それはひとえに、ペリーによる開国以来、欧米の文化を範として、これを見習い、これに

追い着こうとして来たことに由来するのである。

第一、われわれがローマ文字を用いて自分の名を綴る時、歐米式に、姓をあとに書くということは、すでに確立した習慣となった。この点については、中国人の首尾一貫した自國の風習に従う書き方は、中国人の自國中心主義の顕著な現われであるといえよう。

日本人の「他人中心主義」はその他、色々な形で現われる。西洋人と会った時には、相手の風習を尊重して握手をする、というのがその一つ。相手のことばを話すことが当然であり、それが充分に出来ないことについて、相手に申しわけない、という気持を抱く、というのがまた一つの例であろう。

こういう指向は日本で出版される英字新聞などにもよく見られる。たとえば、大阪についての記事で、この日本の都市を説明して、Osaka, the industrial city in Western Japan とか、北海道を、Hokkaido, the northernmost island of Japan などという具合に説明する傾向がよく見られたのである。

いうまでもなく、新聞の記事は、読者に情報を与えるためのものであるから、単語一つにしても、読者に理解出来ないようなものは用いるべきではない。従って、理解されないおそれがある時には説明をしなければならないのは当然である。

さらに、理解可能不可能の基準は固定されてはいない。読者一般の常識の程度によって、説明の要、不要が決まるのである。従って、今から30年前の日本に在住した英米人にとって、tatami とはなにか、という問題も起きたし、kimono さえも説明を要したかも知れない。しかし、今日においては、英字紙の外国人読者の日本についての知識は往時とは比較にならぬほど進んでいる。したがって、余計な説明は、記者や編集者の見識を疑わしめる結果になる。

ある英字紙が、純粹に国内的な政治記事で、今なお、「政府」を表わすのに、the Japanese Government とやっているのを見かける。たしかに、外国人の読者の立場をとれば、the Government だけでは、何國の「政

府」かが不明である、というりくつもあり立とう。しかし、日本で日本人が発行する新聞であれば、これをわざわざ「日本の政府」とことわる必要はない、というのが、ジャパンタイムズの立場である。

日本人はとかく、「島国根性」を意識し過ぎて、その反動として、「国際的感覚」を用いて言動しようとしたときのではあるまい。

その一つの現れであると思われるのは、いわゆる「国際的感覚」を身につけたと自負する日本人——海外旅行をよくする人など——に見られる、「他国中心主義的」な言動である。これらの人によると、伝統的な日本の風習や、思考形態などは、すべて好ましくなく、反面、欧米的な風習はすべて好ましく、われわれが身につけるべきものようである。

こういう「国際人」たちが新聞や雑誌で随想を発表しているのを読むと、日本と欧米との比較において、外国が批判されたり、日本がほめられたりしている例には、殆どお目にかかったことがない。

たとえば、ある人が、ヨーロッパのある地方を旅行した時の、一寸した経験が述べてある場合、それは、その国の文化がいかに優れているかを述べる材料であり、そういう時、たいていの場合、「これが日本であったらどうであろう…」というような筆運びで、わが国の風習が、くそみそに批判されるのである。

仕事の性質上、私はいろいろの外国人に接するが、一つ言えることは、日本を理解する程度が低い人ほど、「日本特質」を指摘し易いということだ。これはどの国の人についてもあてはまることで、日本人でも、たとえば、アメリカやフランスを「少し」理解する人は、よりよく理解する人よりも、アメリカ人やフランス人について、「アメリカ的」、「フランス的」なもの——そういうものが実在するかしないかは別として——を指摘し易いといえる。

こういう人は、「アメリカ人というのは、これこれしかじかの民族でね」などといかにもわかったような口をきくのである。しかしそれは大ていの場合、極めて限られた（あるいは只一つの）事例の個人的経験に基づく、大胆な一般論に過ぎないのである。

しかし、この点については、文化人類学者といわれる、いわゆる専門家の中にも、同罪の人は決して稀ではない。考えて見れば、文化人類学という学問そのものが、いわば比較社会学であって、異った文化の中の共通的特徴よりも、むしろ相異点と見られるものを発見し、記述する学門であるといえるのではなかろうか。

そういう立場で見れば、2つの文化の間の相違点こそ

取り上げて意味があろうが、共通点では意味がないのである。ところが、人間というものは、地球上の、どの地域で社会をなすと、本質的には変わらないものなのだ。異なるのは外観だけである。「義理」や「恩」は日本人が独占する特質ではない。「タテ」の社会も、日本列島のみに見られる現象ではないであろう。ちがうのは、人類共通の特質の現れ方と、その程度だけである。

真の「国際的視野」とはどんなものであろうか。ここで議論のために、一般化してものを言うことを許されれば、たとえば、英米人の間には、自分の基準で他国を評価し、その判断に従って、自己の利益に適うように行動する傾向が強いといえるだろう。極端に言えば、自己の価値観の押しつけである。自分たちの生活様式が、世界で一番優れたものだという考え方である。これが第二次大戦後の、日本占領政策に見られたし、アメリカのベトナム政策において、悲劇的な形で現われたのである。

反面、日本人は、ペリー以後、狭い「島国的視野」を放棄して、「国際的視野」でものを見なければならぬと思うようになったが、これが度が過ぎて、「国際的」のはずの視野が、単に、「他国的」になってしまったといえる。

真の「国際的視野」とは、いうまでもなく、「歐州的視野」でも「アメリカ的視野」でもないはずだ。もちろん、「歐米的視野」とはどんなものかは、「日本の視野」と同様に、客観的に理解する必要はある。大事なことは、一国一文化にとらわれず、自分自身をさえ冷たく突き放し、いわば、大気圏外の視点から地球の表面を眺める態度であろう。

われわれはまず、自分の文化を偏見なく、つまり、「ペリー後」的のものさしを捨てて眺めて理解することに努力すべきではなかろうか。その上で初めて、他の文化をも正しく理解し、その中の、望ましきものをとり入れることも可能になるのである。

そしてまた、自国の文化に較べて、一見、著しく異なった文化も、深く観察すれば、底にある人間性は、実は人類共通のものであることが、おのずから明らかになってくるはずである。

そうすれば、単純に、Aという文化はBという文化より優れているとか、劣っているとかいう議論はなくなるだろう。

国際的感覚とは、ひとことで言えば、普遍的な規準で自国の文化や、他国人との関係を律する能力である、と私は考えている。

(ジャパンタイムズ常務取締役)

## コトバとコミュニケーション

TERAISHI YOICHI

寺 石 容 一

「はじめにコトバあり」である。喋らなくして会話はない。どんなコトバでも同じことだと思う。過去2か月間に会って、又は、国際電話で、話した人物とのやりとりから出たエピソード、実際に感じたことを羅列することによって、todayを語りたいと思う。

① ロッキード事件は日米間の距離を急速に縮めましたし、長くもした。縮めたのは、日米記者間の連絡で、長くしたのは、恐らく日米理解の度合いと方法の「現実的相異点」だろう。『ニュース・ウィーク』誌のワシントン支局でロッキード事件を追うナンバーワンの記者といえば、Rich Thomas記者だった。事件が暴露されてからかなりの日数がたったある夜、私はとにかく話したい一心で国際電話をかけた。東京のニュース・ウィーク支社の友人からRichの話はしばしば聞いてはいたが、何しろ直接話してみたかった。こんな時、国際電話というのはごく便利なものだと思う。第1に、米国にワザワザ出かけてゆくほどの旅費もかかりないし、第2に、ギョーギョーしい前置きなどもいっさい不要だ。何につけても、long distance callなので時間を気にして、従ってとてもaliveなままで、話ができる。会話はすべてテープに取れるし、後から復習できる。時差を計算してワシントンに電話をかけるのは一瞬のスリルがある。金と時間と情報のかけっこだ。

面識もまったくない私は“This is a Japanese reporter”で切り出した。とにかく、私の身元を30秒ほどで説明して本論に入る。Richはきわめて気さく、距離は全然感じない。むしろ、日本の中で他の「老年」記者と話をする場合の方がより距離を感じるほどだ。小一時間ほど話してくれるアメリカのトップ記者に「まだ見ぬ愛情」のようなものを感じて受話器を置く。テープに入った会話を復習して感じたことは次の2点だった。

第1に、ふんだんに日本人の名前が出てくるのでロッキード事件とはいえ、一種の親近感さえ憶えつつ話している自分に驚く。Richも非常にhumbleで、「私の発音はこれでいいのか?」と尋ねながら状況を説明してくれる。そこに、形容のしがたい“若さ”があり、アメリ

カ的“キップの良さ”がある。

第2に、“See you, Yoichi”という最後のコトバで象徴されているように、国際電話だという距離感がない。ひょっとすると、これがアメリカの議会から発されたエネルギーかもしれないな、とフト思う。一方ではごく人々なつっこい、他方ではとても冷たんなやりとりだ。

いずれの場合にせよ、受話器を取って話す相手さえlocateできれば、ワシントンなんてすぐそこだし、frankな会話ができるということであり、それをそのまま一時間もやった。会社（日刊ゲンダイ）に後から課された国際電話料金のことあまり考えずに……。東京とワシントンの間に距離はないということだろう。

② 街をにぎわせた『エマニュエル夫人』や『O嬢の物語』を監督した男Just Jaekin（ジュスト・ジャカイン）に会った。午前11時の予約を10分遅れて帝国ホテルの一室でのinterview。まず、直感的に感じたことは「この男、疲れてるな」ということだった。先方とて英語は第二外国語だ。よし、リラックス・ムードでやろうと決めたのは握手して30秒後の即断だった。これは効を奏した。「今日は10分遅れて申しわけない。昨夜飲み過ぎて今朝はとてもつらい。君にinterviewするほどのエネルギーがないので、ここで黙ってすわっているから、何でも喋ってほしい。あとはテープが何でも録音してくれる。」Justはこれが気に入ったらしく、ペラペラ喋り出した。「ぼくは日本に“O嬢”的宣伝をするためにやってきた。でもとても疲れた。interviewと汽車に乗ることと二条城を見たことがぼくの日本だった」ととても正直。目をこすりながら、フランス語なまりの英語でまくしたてる。「ぼくを影響づけたのは、やはりアルジェリアだと思う。戦争は人の心を変える。愛情と戦争とは同じようなものだと思う。戦争からフランスに帰って色々やってどうにか食っていた。ある日突然仕事をするのがバカラしくなり、それから2年間というもの、食うために必要な最低限の仕事以外はやったことがない。朝起きるとボーとして“さあ、今日は何をしようか”と考える。自分をforceしない日々が2年間続いた。ア

ルジェリアでの兵役を終えてフランスに帰り約10年間も黙々と働いてきた自分にしばしの愛情を与えたというわけ。ゴルフをやり、テニスをやり、酒を飲み、とにかく“仕事！仕事！”という世界から足を洗い、愛情一点張りの生活を2年間 enjoy した。その後つくった映画が“エマニュエル夫人”で、これがヒットした。だから又忙しくなってしまった。」

映画だけ見るとその監督がミッキー・マウスのシャツを着て、「そろそろ疲れたので、ここで俗界に別れをつけようか」と考えている人物なんぞとは夢だに思いつかないに違いない。映画そのものが商品だからである。それを一番よく知っているのが監督で、Just Jaeckin は極めて“あたり前”的フランス・インテリだった。“I like Japan”と言う時、「アイ・ライク・ジャポン」と発音したが、即座に訂正した。「アイ・ライク・ジャパン」「フランス語と英語では Japan の発音の仕方が全然違うんですね」という捨てゼリフを残した。

③ PLO(パレスチナ解放戦線)政治部長、カドゥミ氏(Kaddoumi)が東京の外人記者クラブで演説をやり、質疑応答の機会があった。パレスチナ人というのは離散しているので極めて“国際的”だろうなどと予想して、その“国際的英語”を聞きたいと思った。本物は“極めて中東的な”英語だった。力強い口調の中に、何かはワカラヌなまりがある。恐らくアラブ語のなまりだったろう。質問をした。「本や新聞でパレスチナ人国家建設の案が現存していることをよく目にしますが、どこに国をつくろうというのですか？」「ガザとウェスト・バンク地区になるでしょうなあ。ここ当分の間は。でも、第一に大切なのは、パレスチナ人の国民、もしくは、民族としての権利を獲得することです。」とにかく、話の内容も大切だが、直接やりとりする時のあの何とも言ひ難い直接の反応がこたえられない。相手の目をじっと見すえ、それが終わると口からコトバが出るあの瞬間のやりとりがすべてを決定してしまうかも知れない。なまりのある英語で、語いも非常に少ないことはすぐ判ったが、あの力強さ、説得しようとするエネルギーがどこから出ているのかはその場ではすぐには判らなかった。後になってテープを聞いた。外人記者クラブがテープを保存してくれているので大助かりだ。聞いてびっくりした。すべての質問(そう、約10の質問)に対して同じ力強さでまくしたてている。内容は決して深いものではなかったし、ユーモアもあまり感じられなかった。しかし、一つだけ一貫したものがあったように思える。話そうと欲するエネルギーであり、そのエネルギーがありあるが故にどうやら英語がおそまつになっているような

印象がそれだった。

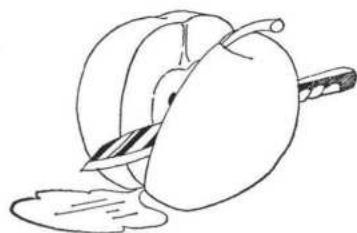
2か月もあれば会う人物の数が多くなる。ましてや、それを商売としている「ブンヤ」の場合はなおさらのことだ。だが、会う人間の数が多くなるということは、興味ある人間に会って話をする機会も多くなるということと同じではない。“興味ある”ということは“その人間からエネルギーを感じる”ということで、それ以外の何物でもない。これだけはコトバの使い方をいくらうまくこなしてみても生まれてきはしない。コトバはエネルギーを伝達する手段としかならないのであって、コトバがエネルギーを create するとは思えない。その意味で上手な interviewer とは interviewee からどんなコトバでもいいからエネルギーを抽出させるのがうまい人のことをいうのかもしれない。

Rich Thomas 氏の場合は、太平洋を越えて話しているという現実にもかかわらず、いや相互にそれを百も承知だからこそ、親しい声で、話し方でやりとりをしようとしたし、そうできたのだろう。Rich の持っているエネルギーは「見ず知らずの奴だがとにかく話してやろう」という優しさであり、同じ事件を違う角度から追っている記者間の友情だったのだろう。

Just Jaeckin 氏の場合は、「互いにそれぞれの理由があつて疲れているのだが、とにかく、interview だから話そう」という一種の職業的居直りがあつたし、それだからこそ、リラックスして放棄できたのかもしれない。Just の持っているエネルギーは「お前もブンヤならこれくらいのことワカルだろう」と遠回しにほのめかしていく intelligence であり、自分の空間だけは誰よりも自分がよく楽しもうとするどん欲さだったのだろう。

Kaddoumi 氏の場合は、「中東からはるばる日本までやってきて、言うことは唯一つしかない」という使命感があつただろうし、それだからこそ、力強く言う以外に道がなかったのだろう。Kaddoumi 氏の持っているエネルギーは、「俺の言いたいことはこれだ。さあ、君ならどうする？」と迫ってくる現実のスゴ味であり、素朴さだったのだろう。

人に会えば会うほど immediate contact は簡単になってくる。これは恐ろしいことだ。何故かといふと、immediate contact が immediate communication を意味していない場合が多いからである。少なくとも communicate をしたい場合は、時間の制限があっても、話す相手のエネルギーの根源を locate し、可能ならそれに正面からとっ組んでゆく努力が最低条件として必要になってくると思う。そのためなら現代といえども時間はたっぷりあるはずだ。 (日刊ゲンダイ記者)



## 文化の生態とその伝達

TAKAHASHI GENJI

高橋 源次

### 1. 文化と文明

土田杏村の『文化』という雑誌が出ていたころ、小原国芳氏の『イデア』という個人誌が出ていた。松原寛の哲学書が学生に人気を呼び、有島武郎の作品が飛ぶように売れていた。同氏のホイットマンの訳が出、富田碎花の『草の葉』も相次いで出た。倉田百三の『愛と認識の出発』を読まぬ学生がなかつたろう。賀川豊彦の『死線を越えて』が何十版と版を重ねていたところである。藤村の「夜明け前」が『中央公論』に連載され、つい先日なくなつた武者小路さんの『愛慾』が出、若人が競って『新しい村』の講演会につめかけるといったところである。大正、昭和と続いて、あの時代を、Humanism のあけぼのと言つていいと思う。人本主義の黎明であったとおもう。

そのころから文化という言葉が、しきりに聞かれるようになったのであらうか。もちろん文化は言葉としてはあったにちがいない。けれども、あのころから文化がドイツ語の *Kultur* の意味をこめて、つかわれ出したのであらう。Civilization が文明で、主として人類の物質的方面の発達を言い文明という言葉がそれにあてはまる。Culture というのは精神方面的文明のことで、それを文化という。そういう説明を、ぼくはいつとはなしにするようになつてゐた。あのころからであらうか。

文化というのは人間生活というか、人生というか、この life の基本問題であつて、文明は人生のぐるりにあるもの、周囲の活動である。今日のやかましい環境問題の源をなすもの、人間が文明に集中して精神生活を忘れたところにある。要はヒューマニズムの軽視が原因となっている。文化——ヒューマニズムに基盤をおくる人本主義——人間尊重の文化が向上しないでは人類の進歩は望めない。進歩はない。そういった人間論、人間生活の精神的風土、文化的生態にあわてて注意を払うようになつて今日多種多様の公害問題に直面するようになったのだ。ぼくはそういう見方に賛成である。

文化という言葉は源流がそこにあったが、もっと通俗

的に用いられていた。このごろでは、全く無意味だが、あの頃にはすごく新鮮味のある言葉に、文化住宅というのがあり、文化の象徴のようにそれはきまつて赤屋根であった。彦根あたりでは高商の西洋人教師館だけであった。英文学者で詩人の竹友藻風さんと同車して仙台の英文学会に出席した思い出がある。昭和12年頃であったろう。ぼくが英国留学から帰つて間もないころで、英國風土に関する発表をしたおりの学会であった。夜行列車が仙台の近くになり、朝もやの中で山つつじが咲いていた。市の郊外にさしかかった際に、先生は、この辺まで来ると文化住宅が全く見つかりませんねといわれた。それは赤屋根のことである。「赤い屋根の文化住宅」の多い阪神方面とはまるでちがう仙台の風景であった。竹友さんの詩風や学問を思う前に真ぐこの話が心に浮かんでくる。

### 2. 文化と教養

Culture という英語は日本語にすると文化と教養と二様になっている。教養が身についているというような表現は主として個人についているので、そんな場合に文化が身についているとか、文化が高度だなどとは決していわない。しかし英語では言う。日本語では、教養のある人だと言っても、例えばギリシアの教養とはいわない。アングロサクソン文化と言っても、あの紳士の文化とはいわない。英語では culture 一本で間に合う。

カルチャーセンターというのが去年東京にできて、油絵、書道、話し方、音楽、英語研修等々個人の教養を身につけるためのいいはたらきをしている。しかしあれを教養センターといわないで、あのようにカルチャーセンターというのは、個人の教養を身につけることが一国の文化を高めることになるという広い高い文脈で企画されているからであらうかと思う。それなら文化センターといえばよいと思われるが、それではカルチャーと言つたときの国際性が感じられない。世界文化の視野から、文化にも教養にも通用するカルチャーという語を用いているのであらう。文化と教養とはどうも区別しにく

い。教養は private なもので personal, 文化は public で national, というふうに公私、大小、広狭のちがいと思えるのである。

Culture という英語の定義は簡単ではない。最近にも two cultures の論争が英國の言論界をにぎわせた。あれは、科学文化と人文文化、機械文化とヒューマニズムの文化というふうに文化を 2 つに分けたところから起きていたのである。科学にしろ、人文にしろ、そもそも文化が 1 つのもので分けられるものではないのだ。いや 2 つだ。こう言えばああ言うで、現文壇の大御所 2 人が鎧を削って立ち向かい、文学の本筋にかかわるものとして英國言論界をさわがせた。

文化は 2 つだと言い、1 つだという。ぼくは、どちらの立場も間違っていないと思うのである。人間は精神物質の両面をもつ以上何れか強調されて、ときには精神文化が表面に出、またときには物質文化がきわ立つこととなる。その意味から文化は 2 つであると言ってよからうし、いやそうではない、文化はそもそも 1 つなんだとも言える。そういうときは、文化の理想的な理念を頭においているのだと見るべきである。Hellenism の文化、Hebraism の文化と、2 つに分けて論じたのがアーノルドであった。が、この英國詩人も文化のあるべき姿を 1 つと見ていた。上記の論争で文化一元論を主張したリーヴィスは彼の系統に立つ批評家である。

Juvenal の言った “sound mind in sound body” は sound culture を謳っているものと考える。すなわち、求めるものは健全な文化であり、教養であって、健全な精神と健全な肉体は過程である、そういう意味にとるべきものとぼくは考えている。

ゴールズワージが長篇小説 *Maid in Waiting* の中で、各国人の culture に言及するところがある。性格描写に秀れたこの作家には当然のことながら意表に出るような点もあって面白い。彼は、異文化間の調和を、また人類の平和を、どの近代作家にも勝って主張しつづけた。各国民がそのもち味を出し合って世界平和、人類協調を表現せねばならぬと考えていた。この作品に出ている culture は日本流に言えば教養の方に傾いている。

この小説の主役が Dinny という、作者のおそらく理想のタイプの女性である。そのおじに Sir Lawrence というのがあって、辛竦な皮肉屋である。彼は各国民の国民性なり、文化を研究することを楽しみにして、各国民の miniature を集めている。みな女性であるが、比較文化の立場から十分参考になる蒐集である。彼は culture を定義する。

“I use the infernal word for want of a better,

and by it I don't mean learning. I mean the stamp left by blood plus bringing up, the two taken strictly together.”

ここで infernal word と言っているのが culture のことである。彼によれば culture というのは学問のあることを指すのではない。生まれに育ちの加わったものである。氏より育ちというのが日本語にある。氏は先天的なことで謂う stamp left by blood にあたるし、育ちは後天的なしつけなり教育のことで bringing up にあたる。氏と育ちが渾然一体のことを culture としている。この立場から各国民の文化的特性を述べるのである。その要旨はこうである。

フランス人。敏捷勤勉で決断力がある。知性的であるが、情的耽美主義に傾き、ヒューマーを解しない。因襲感強く、欲ばかり（目を見ると書いてある）、の形式屋で、独創性がない。明確ではあるが精神的視力が限定されていて、夢幻的でない。機敏だが抑圧された気質である。

アメリカ人。口中に何か目に見えないくわでもくわえているよう、それを自覚している顔付である。両眼には電池があって、それを適宜使用する。年の割に若く見え、趣味は良く、博識だが学問は無い。

ドイツ人。感情に謹しみがない。礼儀に欠けている。しかし良心的でよく働き、義務感が強い。趣味に乏しく、へたなヒューマーを飛ばす。注意していないと太りすぎる。感情ゆたか。良識もあり、何かにつけ諂ひなどがある。

イタリア人。野性的である。仮面をかぶっていて、奇麗なかっこよさ、奇麗な服装ごのみ、上塗りが直ぐはげるが、自分を知らぬのではない、知り過ぎてのことしばしばである。できれば我が道を行く方である。行けばなれば他人の道を行く。自己の感覚に関してのみ詩的である。感情的、危険にさとい。勇気ありだが容易に挫ける。趣味は上品だが、首尾一貫しない。自然への愛が乏しい。知的決断力があるが勤勉でない。探求的でもない。

イギリス人。自意識過剰で、それが非潜在意識になるほどに発展し、抑制されている。ヒューモアあり、ウイットにも欠かない。家事よりも社会奉仕に熱心。動作、思考、判断に精確性（precision）がない。しかし決断力（decision）がある。五官の発達が高度でない。審美感が人工的なものに対してよりは自然なものにはたらく。ドイツ人の受容力（capacity）、フランス人の清潔さ（clarity）がない。イタリア人の二重性（duality）と見せかけはない。アメリカ人の訓練された清潔さ（neatness）がない。しかし英国人は或る特殊なもの

(peculiar something) をもつ。それを現わす語は何か考えてほしいが。

ロシア人、他のどの国民よりも流動的で流暢 (fluid and fluent)，何でも深く極めようとするがそこに長く止まっていたくない。まっしぐらに人生を駆け続ける。酸いも甘いも体験済みで他の国民ほど苦にしない。

スペイン人、彼女は修道院くさみがある。好奇心はあまり持ち合わせていない。精力的でもない。誇りは高いが、うぬぼれではない。愛情には圧倒的なところがあり、話しかけにくいところがある。

この他にこの作家から異文化に関する作品例をもっと挙げることは可能だが、先を急ごう。

### 3. 異文化と同一文化

前項で各国文化について言及したが、東洋諸国は落ちていた。今や特に世界の注目を浴びている東洋諸国殊にいわゆる developing countries についても一言もなかった。東西文化の比較となると直ぐ論題となるのは自然観である。ひいては宗教観であり、人間論である。東洋は自然崇拜の文化であり、西洋はその反対の自然征服型の文化であるといった一般論から始まって日常生活の些事にいたるまで何かと論じられている。しかしこれも今は端折っていく。

Developing countries は underdeveloped 或いは undeveloped countries を婉曲に言ったものである。日本語訳の低開発国はつや消してある。言葉は方便だからといって質的の差別感をいだかせるのはよくない。国名をいうなり地域名を挙げておけばいいのではないか。小さなところで異文化協力とはほど遠い異文化疎外がかもされていくものである。

またまた脱線したが各国文化そのものへの言及は西洋に止めて異文化論に進もう。異文化とは国際文化のこと、国際文化とは同志の文化とはいえ、世界各国と日本との文化関係を指すことになる。日本文化を背負っているわれわれが、世界各国人とどんな関係に立つべきか、日本人が外国人とどう交流すべきか、相互の文化がどう伝達し合うか。そうした立体的な問題としてとらえるべきだと思う。

異文化間と同一文化間の交流について基本的にはどんな前提に立つべきか。それは文化の原点に立って論を進めていくべきものと思う。端的にいうと、ぼくは文化は1つだと考えるのである。それゆえ、特にどうあるべきかについては、基本的には、理想文化論となる。

ぼくの考えはこうである。人間には個人性、国民には

国民性がある。個人も国民も個性を有するという点で毫も変わりはない。個性と個性の関係ということになれば、個人間も国家間も、すなわち、人間社会も国際社会も同じである。そして人間社会は人間という文字が示すように人と人との間にある。国民は国際社会の成員である。何れの国家も国際的なもので、孤立しては存在できるものではない。

上記の各国文化のところで、英国人は precision に乏しいが、decision のある国民性だと性格づけしているのを見た。けれど決断力ばかりで英國の近代科学が発達できたとは考えられない。決断力ばかりで B. Russell の「数学原理」は発見できなかつたであろうことは自明のことである。

Generalization ということは何事にでも警戒せねばならぬことであるが、この文化論には特に禁物である。一般論として simplify することはすっきりして気持がいい。しかし物ごとはそう簡単に割切れるものではない。白でなければ黒というふうに万事運ばない。特に文化は相対的に考えるべきことがらである。

上来述べたところで文化と国民性とを峻別しなかった点なきにしもあらずでないかとおもう。でもそれはかまわない。Stamp left by blood plus bringing up が culture の定義として正しいと思っているのだから、個性が主体で、それに手の加わったものが眞というものが、それが教養であり、国民の文化であると考えるからである。Culture をもたぬ nationality はないし、nationality をもたぬ culture もない。エマースンの English Traits をひもとくと、英国人の気質なのか文化なのか見分けのつかないところが多い。

異文化間の問題も、同一文化内の問題も、必竟おなじ次元で考えてよいのではないかというのがぼくの言いたいことなのである。言葉の交流ということについても本質的には同様だと思う。東北弁と鹿児島弁とは随分ちがう。発音も言葉自体もちがう。英國でも地域によって随分ちがつた英語になっている。英語と日本語の違いほどには違うのではないことは申すまでもない。けれども、それは矢張り degree のちがいで kind のそれではないことは勿論である。最近1年ほど英國の若い女性が2人ぼくの家に一緒に暮した。ぼくが英國に2年近く留学した折にたのしい家庭生活をさせて貰ったのを思い出して、何のへだてなく日本家庭のありのままを見せて、実際にたのしい日英文化の融和の生活をしたことであった。ぼくと家内と彼らの4人暮しの中に、異文化と異を唱えることもあるあっても、よく話すとそれは degree のちがいのこと、異系統のものなぞのものではなかった。

#### 4. 文化と伝達

伝達といえば普通は言葉を用いるものと一応は考える。言葉自体が文化である以上言葉による伝達は文化の伝達ということになる。

生態から切り離して言葉を考えることがある。いわゆる真空管の中の言葉である。言葉の生きた機能をそういうふうに抽象的に扱って文法をつくることはできる。それは文法のための文法であって伝達のための或いは人生のための文法ではない。文法はよろしく言葉の生態から割り出すべきものである。生物として言葉を扱わねばならない。思想感情を伴わない言葉はない。思想や感情は人間の生命である。生命の表現としての言葉の機能を考えるのである。言葉を文法としてではなく文化として、生きた文化として把握する。言葉が骸骨のようではなく生命体として、部分ではなく全体として発表される。発表にも受容にもそのようにして初めて真の相互伝達が実現されるものである。

表現と presentation, 呈示というか、演出というか、この両つを省察せねばならない。Expression は主体的のもので呈示の仕方によって相手にそのままに伝わらない。客觀性をもたせるには表現者、発表者の演出的工夫が要る。芝居では俳優は presentation に留意しすぎて肝心の表現、人物の心からの expression がお留守になる点に警戒せねばならない。Actor はある意味では、道徳的な意味でなくて hypocrite になって、しかも己れを發揮せねばならぬものである。ヒポクリットの語源が面白い。ギリシア語の act in theatre から来ている。

Listener が speaker の言葉をそのままに受けとる。Television のように映像を伴なう場合、声だけのラジオの場合、三態三様である。どの場合も言葉の真実が伝わらねばならぬことは勿論のことである。

伝達は文学の場合も同様に考えねばならぬが、文字は話し言葉以上にむつかしい。特に外国文学の場合には外国语の handicap がある。文学の場合、殊に詩の場合には特別にそれを感じる。詩は感情に訴えるからである。

そこで読者の主觀で読みばいいといった意見もでてくる。言葉の芸術としての文学は程度問題であるが、主觀的な或いは主体的な接し方が必要であることは申すまでもない。しかし、どう読まれるかには全く無頓着に自己表現するのは行きすぎである。書くのも読むのも anarchy では困る。読者無視も困るし、作者無視も困る。

英詩の困難は日本詩の困難と程度こそ違え同質である。ぼくは伝達無視の文学は認めない。

そこで、言葉の伝達はどうしても言葉の生態からかも

し出される領域、霧囲気、気分、環境を無視してはできないものと考える。その点が近年特に注意せられるようになってきた。Non-verbal communication の世界が verbal communication 同様に重要である。音としての言葉でない言葉を聞く力、文学の方でいえば、行間余白を読む想像力が必要である。白紙の文学の意味をさとらねばならない。目に見えず耳に聞こえない言語文化の世界である。Context や situation の理解を英語教育でどうとぶ。英語とその文化を、日本語と日本の文化の文脈で理解しようとしてはならない。

Cultural shock という言葉をこのごろよく聞く。あの言葉はぼくは十数年前のこと、T. E. Hall の *The Silent Language* を読んだ折にでくわした。同氏の近著 *The Fourth Dimension* も文化理解の重要性を解いていて面白い。また、最近気をよくして読んだものに、Dr Haugen の *The Ecology of Language* がある。著者が英語文化の ecology を信念にしている点大いに気に入った。

Ecology という言葉こそつかわなかったけれど、その意味の英語観なり英語教育観は長年のぼくの主張である。英語のエコロジーを知る。それは英語の文化をわきまえることである。Para-language とか、para-communication にいたく興味を覚えたのには、ecology を大事にし、言語や伝達の生態を重んじるからである。言語活動を重要視する語学教育の基本哲学もそこにある。

#### 5. 文化と心

一知半解もあれば、曲解ということもある。難解もあれば、誤解ということもある。正解ということは容易なことではない。

言葉のむつかしさもあれば、文脈のつかめない場合もある。

どんな文章も発言も動機がある。なにゆえにその言葉があるのか。なにゆえにその文章が書かれるにいたったか。いわゆる motivation を究めねば判明せぬ。

心理学でいう潜在意識の世界に動機をもつとなると、それは、とても簡単ではない。しかもそれが判明せぬかぎり、理解がなりたたないといった場合がしばしばである。

Locke の *Human Understanding* を読むと、言葉の abuse のことを細説しているところがある。ことばの悪用、誤用、濫用のことである。発表者が正しく用いておらないかぎり正解されることはおぼつかない。憶測して意味をとる。それでは困る。正しい推測をする場合でも、その正しいという正しさがあてにならない場合が多い。勝手な憶測にいたっては言語道断である。

発表も理解とともにむつかしいものである。むつかしいのが理の当然で、もともと人が人を理解することは不可能なことである。理解し合うことが不可能だとすれば伝達論がお手あげである。或る言語学者とその著書に出ている理解不可能論について教えを乞うたことがある。やはり、言語による相互理解は限界があるので、言語以上の努力が必要だということであった。その努力というのは相互理解の基盤としての努力で、一言でいえば愛に尽きるということに他ならなかった。

ぼくがさっきふとつかった言語道断というて思い出すのは、これは、もってのほかという意味で用いられるが、もともと仏教の「一切言語道断」のことである。究極の真理というものが人間の言葉では表わせないものとの意味から来ている。表現がそうなら理解もそうであろう。言語とは便利でまた不便なものである。

これら言葉のむつかしさは、言葉は心のあらわれであることとに基因する。人の心は万人万様である。「言、心声也」と中国ではいった。荀子の言語観の基本である。中国には本は心で読む、それを「心到」という、という言い方もある。口到、眼到を加えて三到の誠となっている。

心で理解するとは心を理解することでもある。心の communication である。言葉の心というと、ことだまというのを思い出す。あれは神秘的な靈力が言葉に内在

することをいうことで、一種の民俗信仰である。それにしても言葉は心というのとそうへだたりはない。“Out of the abundance of the heart the mouth speaketh” (*Luke*, 6. 45) というのも「言、心声也」と同様の言語観である。

心で書かれたものは心で読む。心で話されたものは心で聴く。心読、心到が肝要である。伝達とは所詮こころとこころの交流である。それは言語それ自体にとどまらず、およそ文化というものの生態である。

Humanism は現代および将来の文化とその交流の源泉であらねばならぬと確信しているぼくである。心の文化、心の伝達はそもそも愛の心のそれであるべきである。愛の心なくしては文化はすたれ、伝達は形に終わる。愛の文化、愛の伝達こそが人間実存の規範であり、人類生態の根基である。

愛語（道元）はぼくの好きなことばである。それは天を動かすと言われる。

言仁（荀子）を談説の基本とするのは儒教である。

「愛なくば鳴る鐘や響くにようはちの如し」（聖ボーロ）というのは基督教の言語観である。

みな伝達の基盤としての愛を説いている。

有言無言の区別なくおよそ人間の文化は humanism に立つことが望ましく、humanism は伝達の愛にはぐくまれる。

（前 ELEC 英語研修所長）

## MY PAST HOPES

Some dead leaves  
Were crackling  
Along the street.  
  
Suddenly they were  
Run over by a rushing  
Motor-car.  
  
Looking at the crushed  
Remains of my past hopes,  
I walked on  
  
Where the autumn breeze  
Was soughing  
Past me.

## EVENING

The temple-bell is ringing  
Its swinging way  
Into thickening twilight.  
  
My heart is winging  
Its pondering way  
Into the golden height.  
  
My life's evening  
Is deepening its way  
Into star-spangled light.

by Tsutomu Fukuda

## Cultural Patterns of Communication and Language Teaching



John C. Condon

*Professor of Communication,  
International Christian University*

Language is an important part of communication, but it is only a part. In the long history of communication studies, most attention has been given to the words expressed, what those words revealed about the speaker's intentions and what effects they seemed to have on the listeners. In recent years, however, the interest has shifted to viewing communication as a transactional process, with the growing awareness that what is heard is at least as important as what is said, that how one interprets what he hears is as important as what a speaker intended, and that what is communicated without speaking may be as important as what is said. One scholar, Ray L. Birdwhistell, has estimated that in a conversation what is communicated explicitly by words may be only 30% of all that is communicated. Another scholar, Albert Mehrabian, has reduced that estimate to a mere 10%. These researchers were making estimates for conversations by talkative Americans. They were not examining *Haragei*.

Interpersonal communication involves much more than language. To a great extent the unspoken assumptions and expectations, the tone of voice, the posture and gestures and facial expressions, even the setting and occasion for the communication will influence what is said and how the spoken words are interpreted. We may go even further and speculate that often, unless these other considerations are taken into account, we cannot be sure

what a particular statement means. My purpose in this paper is to encourage a greater appreciation of some of these other matters, particularly as they relate to cultural predispositions, in the teaching of language. I am not suggesting this as a substitute for language teaching but as a complement to language teaching.

Consider these words: "*Do you speak English?*" If presented out of any social context (or in a classroom context, as a sentence in a drill or written on the blackboard) students with a rudimentary knowledge of English could explain the "meaning of these words." But if it is true that words do not mean—people do—then perhaps we cannot be sure how to interpret that sentence until we know more about the situation in which it is expressed. Or perhaps we could say that these words have potential meanings which become more restricted within the context of a particular communication situation.

Imagine for a moment being at Shinjuku Station and there seeing somebody who looks rather tall, who has blond hair and blue eyes and who in other ways conforms to the stereotype of the *gaijin*. (So far nothing has been said but, perhaps, much has been communicated.) Now imagine that this person walks over to someone whom you might identify as a Japanese high school student, and to this student he says: "*Do you speak English?*" What might those words spoken by

that person to the other in that situation mean? The man might mean something like this: "Excuse me, I'm not Japanese and I don't speak or read Japanese, but I am trying to get some place. You seem to be Japanese, so you must know your way around here and you can read some of these signs I cannot; you also seem to be a student, so perhaps you speak some English. If so, would you be so kind as to help me."

Imagine the same people in the same setting and the same words expressed, but with one important difference: this time it is the Japanese student who goes over to the stranger and asks: "*Do you speak English?*" In this case, what might be communicated? Without detailing all that might be assumed and implied, the student might well be asking: "May I practice my English with you?" Here, then, we have two quite different "meanings" for the same sentence, neither of which is explicitly indicated by the words, neither of which would be guessed at by any one reading that sentence in a pattern drill. I believe that there is no way of going directly to either of those interpretations without including assumptions and expectations based in part on the physical appearance of those people, the setting, and other considerations.

Moreover, those two interpretations might be anticipated even before any words were said, or by hearing only a part of the sentence. This is because we respond to the situation and what we are expecting based on past experiences, at least as much as we respond to what is expressed in words. If it is possible to teach, along with language, something about assumptions and expectations in communication and how these vary somewhat from culture to culture, then language teaching might be even more effective. I think it is true that when one is listening to remarks in a language in which he is not fluent, he can follow a conversation fairly well if he knows what kinds of things are likely to be

said and what the nature of the situation is. On the other hand, a person with greater abilities in a second language—as indicated, perhaps, by a larger vocabulary—can feel at a total loss when he cannot grasp what is going on and hence has no clear expectations of what kind of remark might be said next.

Perhaps the point can be put this way. It may be easier to make inferences about the meanings of unknown words when one knows the interpersonal situation in which they are expressed, than to make inferences about the unknown situation based on the "literal meanings" of the words that are said. Therefore if students could learn some of the characteristic patterns of communication for, say, Americans, as well as some of the underlying American values which give rise to certain expressions and some of the expected role behaviors in typical communication situations, perhaps the students could utilize their English language skills more effectively in communicating in English. In the remainder of this paper I would like to suggest some of these matters that might be introduced along with the teaching of English as a language.

Two terms which are helpful in describing some aspects of interpersonal communication and which are also useful in considering intercultural communication as well are: *symmetrical relationships* and *complementary relationships*. A symmetrical relationship is based on similarities in age, sex, status, expected role behavior, and so on; a complementary relationship, in contrast, is based on differences between two persons—in age, sex, status, and so on. Two close friends who are school mates would be likely to have a symmetrical relationship, while the relationship between a father and his young son would be complementary. While it is true that every person has a number of relationships of each kind, it also seems that there are cultural influences which tend to favor one kind over the other—at least when cultures are com-

pared. American values encourage symmetrical relationships. Generally Americans do their best to minimize such differences, regarding them as unimportant or at least detrimental to good communication. In language, and increasingly even in clothing, American men and women express themselves similarly. Titles or ranks tend to be used sparingly. There are not a few American college teachers who may be called by their given names by their students; there are even some university presidents who encourage students to use their given names. At a party at one's home it is often difficult to identify who are the guests and who are the host and hostess: "make yourself at home," we say, and this can sometimes include asking a guest to answer the door or the phone or fix himself a drink, in case the host or hostess is busy. Americans tend to prefer informality to formality in clothing, forms of entertaining, in teaching, and in language use. Such informality both reflects and facilitates symmetrical relationships.

In Japan, it seems, there is a much greater appreciation of complementary relationships. One must determine his or her relationship to another person—considering differences in age, sex, rank, status, and so on—in order to express oneself appropriately. Nonverbally, complementary relationships may be expressed through how low or long one bows or in seating patterns, such as who sits at the *kamiza* or *shimoza*. Husbands and wives are likely to have, and to value, different roles. Relationship words, such as *one-san*, express relative differences in age as well as sex and are used as forms of address. Other terms or titles which express rank or role are also used for forms of address. In such ways the value of complementary relationships is reflected and maintained.

I am told that the words "*senpai*" and "*kohai*" are among the most frequently used words in Japanese; these, too, of course,

express complementary relationships. There is also the word "*dohai*," which would express a symmetrical relationship, but this word is used far less. In English, or at least in American English, we seem to have no equivalents for "*senpai*" or "*kohai*." We have several words, used often, that might correspond to "*dohai*." Although many other examples from Japanese and English could be given, we should be careful not to suggest that such differences are the result of differences in the language. Language may in fact be an influence, but I prefer to believe that the forces that lead to favoring either symmetrical or complementary relationships arise from cultural values rather than language. In England you are more likely to find interpersonal relationships which are closer to what I have described for Japan than for the United States. In Australia, on the other hand, the relationships are more likely to be closer to those of the symmetrical pattern.

A second pair of terms that might be considered here is that of "objective values" and "interpersonal values." A colleague in Mexico, who is a psychologist, first suggested this distinction in comparing North Americans with Mexicans, but I find these terms are also useful in comparing North American and Japanese patterns of interpersonal communication. As with the previous distinction, each person may hold to both objective and interpersonal values, depending upon the situation. Nevertheless, at the more general level of tendencies within a culture, we may find one or the other kind of valuing more pronounced. "Objective values," in this case, refers to the importance of candor, directness, facts, specifics, and so on. "Interpersonal values" here refers to the importance of maintaining human relationships, concern for the other person's feelings, empathy, etc. Obviously such a distinction is oversimplified, and each of these terms contains several value orientations which might better be considered separately. More-

over, values refer to what one should or shouldn't do, and not necessarily what one always does. However, despite these limitations, the distinction may be helpful.

I believe that in the United States, a person feels that his primary obligation in communicating with others is to express as clearly and as honestly as possible his own beliefs and opinions about the subject of discussion. Similarly, he hopes that the other person will do the same; thus a good discussion is the give and take of such candid opinions. One may sometimes express such truth in jest—often in sarcasm—or one may sometimes move to a higher level of abstraction ("your paper was very...interesting"), but the American should feel bad if he has to say something that doesn't in some way correspond to what he believes.

Perhaps the above description is not much different from what a Japanese might say is true in Japan. Nevertheless, it may be that interpersonal values hold an even greater importance. In Japanese conversations there may be more cautious explorations of the other persons views before one expresses one's own opinions, and the form of such expressions may be even more tailored to harmonize with the other's apparent feelings or opinions so as to avoid conflict. Japanese in conversation may be more sensitive to underlying meanings or hints at what the person is feeling; Americans may tend to take words more at face value.

Allow me to give a trivial example of such a difference, but hopefully one that will help to make the point. When I am invited to give a public lecture, I am sometimes also invited for a lunch at a restaurant; and if I am the guest I am likely to be asked to order first. If I were in the U.S. I might or might not be invited to order first, but if asked I would probably choose from the menu whatever I wanted. If I were not hungry I might say so and order just a sandwich and a cup

of coffee. In Japan, some time ago, I was invited to a lunch and, being not very hungry, said so and ordered a salad or some such small item. This caused great confusion at the table, for it seemed to make it much more difficult for the kind professors who had invited me to order what they wanted. What they could order was influenced in part by what I had ordered; had I thought about this my order would have been changed, influenced by my expectations of their orders. My reaction expressed objective values: they asked me what I wanted and I said so. If the interpersonal values were more important, I would have changed what I really felt or wanted because of my concern for the others. One other observation about this example. Although I said before that in the U.S. I would have ordered whatever I wanted, that is not quite true. I think I would avoid ordering the most expensive item on the menu. To that extent there is some indication of a concern for the others' feelings and their budget. But even that shows a choice based on some objective standard—the prices printed in the menu—rather than the more elusive matter of feelings and expectations.

To the extent that this kind of distinction may characterize many speakers of English and speakers of Japanese, we might expect some differences in the use of the respective languages. If a Japanese speaker says to an American "It's all right, I don't mind at all," the American is likely to accept those words as spoken: "He said 'it's all right,' so everything must be all right." But it is possible that the Japanese speaker, though speaking in English, was thinking more in terms of interpersonal values; that is, he might hope that the American would have sense enough to realize that things were not all right at all. Holding to objective values leads one to feel a person should "say what you mean and mean what you say."

A Greek student studying in the United

States once remarked to his professor that English seemed to be the only language that used a capital letter for the first person singular pronoun: I. The student went on to comment about how revealing was that capital I (what Prof. Edward C. Stewart has come to call "the capital self") about American behavior. It seemed to express, to this student at least, American individualism and independence, qualities which may correspond better to objective values than to interpersonal values. In Japan I have sometimes heard students say that they feel more individualistic when they speak English than when they speak Japanese. Part of the reason may be related to pronoun differences—in English I am *I* no matter who you are, no matter what our relationship is; this is in contrast to different language forms in Japanese for different kinds of relationships. But even more important may be the underlying values about expressing one's opinions.

English has also been called, by some Japanese, "an aggressive language," perhaps for related reasons. I have even met an attractive young Japanese lady who teaches English and who worried that she was losing her femininity because of speaking English so much! But again, I would not blame the English language for such feelings; rather, I would look to cultural values and expectations in interpersonal communication which guide the use of that language. The model "Southern belle" of a part of the southeastern part of the United States is (or was) in many respects more like a model Japanese woman—in expressions of shyness, "femininity," in showing deference to men, etc.—than like a modern "women's lib" American woman, even though both would speak English.

In passing, we might note two other aspects of communication which correspond to differences in values as described previously. One would be the use of qualifiers. I believe that I hear Japanese speakers of English using

qualifying words like "perhaps" or "maybe" more often than native speakers of English in the United States. From one point of view these express a feeling of caution or perhaps modesty, much valued in interpersonal relations. From the point of view of some Americans, these may seem to express an uncertainty of beliefs or a reluctance to speak out, and so are not valued if one wants to hear a clear confrontation of different opinions. This leads to the second matter, agreement and disagreement. For interpersonal harmony, agreement is most desired. Outwardly, in public discussions, Japanese always seem to be agreeing. Americans in contrast seem to value disagreement, sometimes even for the sake of disagreement and to make for more interesting and lively discussions. If an American says "I think such-and-such is true...Now you tell me what you think," the American may be hoping for some difference in opinion. If the Japanese speaker replies, "Yes, I think so too," the American may be disappointed. (Of course for many subjects Americans value agreement, too, but disagreement occupies an important place in American communication, from class-rooms to cocktail party conversations.)

I hope that in these remarks I do not seem to suggest that one pattern is better than another. If I had to make such a choice, I might have to side more with the Japanese values, for in many respects they are more consistent with some theories of interpersonal communication and semantics. But that is not the point, either. When students learn to speak English, if they expect to have opportunities to speak with persons who do not share the same values and assumptions about communication, then they ought to learn something about the values and assumptions of those speakers. At the very least they should be made aware of the fact that there are such differences.

This same line of thinking could be applied to matters of style, too. North Americans tend

to exaggerate in many situations where Japanese may seem to minimize things or humble themselves. As my colleague Dean Barnlund put it, "Americans are never thirsty—they are dying for a drink. They are never hungry, they are starving!" (And even his use of "never" may be cited as further evidence.) Sometimes such American maximizing takes the form of rank order statements. That is, instead of saying "Bob is a nice person," Americans are more likely to say "Bob is one of the nicest persons I know"—as if the speaker had made a list of all of the nice people and found Bob's name near the top.

Another pattern that takes many forms is what I call "the rule of three." In fairy tales there are often three little kittens or three little pigs or three billy goats and so on. Kings and Queens often have three sons or three daughters; they receive three wishes or go through three trials, and so on. In narrative jokes, very often the story consists of three parts. The listener knows that the funny part of the joke or the successful son or the end of the tale will appear in the third part.

If students of English could learn to expect such matters of style then they, like native speakers, would be better prepared to understand stories, jokes and speeches without trying to listen to every word. There is nothing in the English language which requires exaggeration, or a logic of three in telling stories and jokes; but there appears to be something within the shared expectations of a people which encourages such expressions in the language.

In teaching the English language there is nothing wrong with introducing a sentence like "This is a pen." In teaching English for communication, however, the sentence might be reconsidered. Ordinarily we would not have occasion to say "This is a pen." *This* usually means something we can see, and if we can see it there is no need to tell the

other person that it is a pen. If students are to learn American communication patterns in English then there are other sentences which may be more representative: "This is great" or "This is awful" or "This is fantastic!" American school children talk that way. So does Mohammed Ali. So did Richard Nixon.

But now come some problems. Exaggerating, putting expressions of praise in a rank order form, even being blunt and avoiding qualifying words are not necessarily good habits to learn—at least for self expression. But they may be helpful in understanding what American speakers of English are saying. Teaching something about cultural assumptions and expectations along with language teaching may be more appropriate for listening and understanding rather than for speaking or writing.

A more serious problem with English is that the language is spoken in many different cultures. In Trinidad, Liberia, Australia and Canada where English is spoken the cultural assumptions, expectations, and values are somewhat different. Even within a single country there are some striking differences from region to region, and across sub-cultures. If something about cultural patterns of communication were to be taught, which culture or cultures would be discussed? Perhaps this problem is not so very much more difficult than deciding to teach "*color*" or "*colour*," or calling a particular tool a "*wrench*" or a "*spanner*." I would suggest that the cultures that students most often get glimpses of through television programs, films, even records, might be those that are discussed. At present in Japan the U.S. seems to exert such influence. If some years from now Australia has a greater influence, then observations about Australian patterns of communication would be more appropriate.

The particulars of what to teach and how to introduce such information is yet another matter. Teachers might well feel that it is

difficult enough to develop competence in the language without also having to learn about cultural patterns of communication. But fairly simple methods of presentation such as those used in Peace Corps training programs are available, and with sufficiently modest goals the problem of content and methodology should not be a serious problem.

The major questions concern goals and priorities. Does one stress form over function or function over form? Is getting a message across, even in ungrammatical English, to be encouraged? Or is grammatically perfect English which may not convey what one wishes more important? (Admittedly these are biased questions.) Should English teachers emphasize what *could* be said in English or emphasize what is *most likely* to be said? Are the oral-aural skills in English more important than reading and writing, or is the reverse what should be stressed? Decisions about such matters will obviously influence how much attention one might want to give to such matters as facial expressions, gestures, tone of voice, etc., as well as cultural values, assumptions and expectations.

We have now entered the last quarter of the twentieth century. At the beginning of the twenty-first century today's junior high school and high school students will be about the same age as their teachers are now. At that time we are likely to have re-entered an era of oral communication. Surely books and other print media will still be important, but there may be much more interpersonal communication across cultures, and much of that will be in English. There is no need here to recite the developments in transportation, electronic media and economic growth which make these available to more and more people in Japan. We probably will not enter what Marshall McLuhan calls "the global village," but we may be within commuting distance of that village. Who will prepare today's students for effective and satisfying communication with persons in many other parts of the world? Perhaps at present in Japan, the English teachers have the greatest opportunity to evoke an awareness of cultural assumptions and patterns of communication as part of the language education.

## 新しい英語教育

山家 保著  
860 円

英語教育実践の第一人者である著者が、豊富な経験と深い言語理論の研究から、現状に即してまとめた英語教育関係者必携の書。

教材と指導法の両面から検討し、授業の能率を向上させるための適切で示唆に富む本書は、授業のあるべき姿を指示し示し、現場で直面する困難に明快な解決策を与えるであろう。

## ENGLISH TEACHING FORUM

年間購読料 1,200 円  
申し込みは直接 ELEC へ

米国 USIA が言語学・英語教育の専門家の協力を得て発行する英語教育専門誌。1976年度はアメリカ建国200年祭特集号を含む4冊の発行が予定されている。

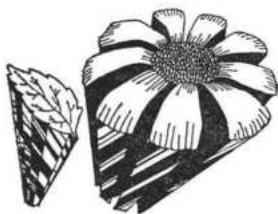
1975年 英語教授法特集号 在庫僅少  
Part I 言語学と文法／教室英語／指導法  
Part II 読解／作文／テスト／ゲームと歌

Part I, II 共 各 600 円

ELEC 出版部

# バラッドの世界(その5)

—チャイルド 79A をめぐって(承前)—



スコットがウェストロージアン州の老婆からきいてその民謡集 (*Minstrelsy of the Scottish Border, 1802*) に採録したバラッドがチャイルドの79番 A version になった次第に前稿で触れた。18世紀の後半、スコットランドの田舎でこのバラッドが、スコットが記載した通りの形ではなかったかもしれないが、実際に伝承されていたことは、ほぼ間違いないであろう。周知のように、F. J. チャイルド教授のバラッド研究の姿勢は、徹頭徹尾、文献、つまり活字本意だったので、バラッドがどういうふうに口承されていたか、現実にどういうふうに歌われていたか、といったようなことには、まったく関心がなかった。したがって、わたくしたちは19世紀末のチャイルドの大集成 (*English and Scottish Popular Ballads, 1882-1898*) をひもといてみても、ある特定のバラッドが、チャイルドの時代に、なおも伝承として生きていたかどうか、というようなことは皆目わからないのである。(チャイルドのこの文献オソリーの接近法を日本的一部バラッド研究家は、かたくなずに踏襲している。) チャイルドにとって、バラッドは、すべて過去のもの、文献以外の形では存在しないもの、だった。79番の "The Wife of Usher's Well" (以下便宜上 Usher's Well を UW と略記する) が伝承として生きているかどうかということは、チャイルドにとって問題としても存在しないことだった。

いうまでもなくバラッドが伝承として生きているということは、ただ文献あるいは記録として残っているだけではなく、現実に口承されている(たとえその範囲が限られていても)、ということである。では、"The Wife of UW" は、現在も伝承として生きているのだろうか。残念ながら英本国に関する限り、答えは no となりそうである。イギリス、ショッブルプシャー州の老漁師から1883年に採録されたのが最後の記録になっていて(A. L. ロイドによる)，以後、伝承から消え去ったとみえ、フィールドで民謡学者がこのバラッドに出会うことは、もはや望みえないこととなっているらしい。

HIRANO KEIICHI  
平野敬一

## "The Wife of UW" の朗読

もちろん、レコードなどでこのバラッドの朗読 (recitation) を聞くことは可能である。わたくしの手もとだけでもブルックス (C. R. M. Brookes), ローリー (John Laurie), リード (Kathleen D. Read) の3人がそれぞれ吹き込んだレコード<sup>1)</sup> がある。この中で元グラスコー小学校長で詩の朗読では比肩する者なしといわれたブルックスの朗読が、やはりいちばん迫力があるようと思われる。その朗読に使用されたテキストは本誌前号にかかげたチャイルド79Aそのままである。2番目のローリー(発音からスコットランド人らしい)の朗読もブルックスに劣らない力演だが、テキストの方はチャイルド79Aにさらに79Bからその第5連を借りてきて全部で13連になっている。この79Bの第5連というのは、夜明けになって末弟が長兄に「もう去らなくては」("We must awa") と促すのに対し、長兄が答えるところである。すなわち

"Lie still, lie still a little wee while,  
Lie still but if we may,  
Gin my mother should miss us when she wakes  
She'll gae mad or it be day."

(「じっとしていよう、できることならもう少しじっとしていよう。もし母上が目をさまして私たちのいないことに気づいたら、夜が明けぬうちに発狂されるだろう。」)

(語注 : but if = if only; Gin = If; gae = go; or = ere, before) チャイルド 79A に 79B のこのスタンザだけを加える場合が、他にもしばしばみられる。3番目のリード

1) *Poetry of Robert Burns and Scottish Border Ballads* (Caedmon TC 1103); *The Jupiter Book of Ballads* (Folkways FL 9890); *Early English Ballads* (Folkways FL 9881).

のテキストは79Aから11連、79Bから2連、その他出所不詳（少なくとも筆者にとって）の1連を寄せ集めて1つのバラッドとしたものだが、前者よりは冗長になっていて、効果もそれだけ弱くなっているように思われる。

三者三様のとりえはあるが、しょせん、バラッドの朗読というものは、どんなに工夫してみたところで、伝承（あるいはかつての伝承）の実態とあまり関係がないように思われる。朗読が現代におけるバラッドの一つの有力な提示法（教育的な？）たりうることは認めるが、伝承としての朗読の存在を、わたくしは、どうしても想定できないのである。

### 唄としての “The Wife of UW”

では “The Wife of Usher's Well” を、こういった朗読以外の形、つまり歌われた形で、わたくしたちは、もはや聞くことができないのだろうか。スコットがかつて耳にしたバラッドの響きは、どういうものだったのだろうか。キンズリー編の『オックスフォード版バラッド集』(1969) にはスコットの詩集に掲載のメロディーが転載されているが、これが採譜としてどのていど正確なのか、わたくしたちには確かめるすべもない。また、レコードやテープによる機械的に正確な recording が可能になってからの記録は、“Wife of UW” に関する限り、存在しない。

スコットが耳にしたメロディーは、想像の中で復元してみるより仕方がないが、現在、唄としての “Wife of UW” を、わたくしたちが聴けないわけではない。その一つは、マッキューウン (Alex McEwen) がレコード<sup>2)</sup> に吹きこんだ version である。マッキューウンの唄は、全部で9連からなり、すべてチャイルド79Aに依拠している。テキストは ‘printed source’ によると自分で明言している。伝承が途切れている以上、これは止むをえない。その歌詞を、いささか哀調を帯びた静かな单调なメロディーにのせてマッキューウンは歌うのだが、そのメロディーを軍隊で覚えたという。バラッドに限らず伝承童謡や民謡でもそうだが、歌詞と曲の組み合わせは、かなり自由な、流動的なものであって、歌詞とは別のルールに従って伝承されてきた、さまざまのメロディーの総体の中から、歌詞に合う適当なものを選ぶというやりかたが、昔から行なわれている。歌の数が曲の数よりも多くなるので、必然的にそならざるをえないのである。（たとえば “The Noble Duke of York” と “A-

2) Great Scottish Ballads sung by Rory and Alex McEwen (Folkways Records, FW 6927), 1956.

hunting we will go” のように相互になんの関係もない2つの伝承童謡が同じメロディーで歌われている。）

マッキューウンの歌う “Wife of UW” は、したがって、厳密にいえば、伝承の中に現に生きている version とはいえないが、スコットランドのバラッド伝承に、かなり雰囲気として忠実であるように思われる所以、わたくしは教室でよく教材として使っている。

もう一つわたくしの手もとにあるイギリス版の “Wife of UW” は、ロック・グループとして人気の高いスティーライ・スパンが昨年レコード<sup>3)</sup> に吹きこんだ version である。歌詞はほぼチャイルド79Aに則しているが、メロディーは新作のロック調。こういう形で古い伝承バラッドのテーマと歌詞とが、いまも生きうる証左になるのかもしれないが、この作品がどのていどイギリスの若い聴衆の受け入れるところとなったか、まだわたくしには情報が届かない。スティーライ・スパンは、そのレバートリーに盛んに伝承バラッドを取り入れ、それによって自分たちの作品を豊かにすると同時にバラッドの伝承に新たな命を賦与しているわけだが、現代におけるバラッドの伝承を考える場合、もう一つのグループであるペントングル (The Pentangle) と共に、その活躍を無視することはできないように思われる。しかし、スティーライ・スパンのこの “Wife of UW” に関する限り、作品としては、このグループの他の作品と比べて、いささか弱いという印象を受ける。

どうも話が先へ進みすぎたようだが、伝承バラッドの生命を、現代文化という文脈でとらえようとするなら、こういう British rock のグループが果たしてきた役割を見落とすわけにいかないように思う。

### アメリカにおける “The Wife of UW”

いったん伝承として途絶えていた「UW のおかみ」に、マッキューウンやスティーライ・スパンが新しいよそおいを与えて甦らせた（あるいは甦らせようと試みた）わけだが、目を新世界に転じてみると「UW のおかみ」が伝承として途絶えるどころか、脈々と生きている例を数多く見出すことができる。

一つの例は、ケンタッキー州のリッチー家に伝わっている version<sup>4)</sup> である。これはジーン・リッチー (Jean Ritchie) がその叔父 (Jacob Ritchie) から習ったものだが、おどろくほど忠実にスコットランド伝承のチャイル

3) All Around My Hat by Steeleye Span (英 Chrysalis Records, CHR 1091), 1975.

4) See Child Ballads in America, vol. 2 Sung by Jean Ritchie (Folkways Records, FA 2302), 1961.

ド79Aの歌詞を踏襲しながら、必要最小限のアメリカ的修正(?)をほどこしている点がおもしろいので、その一部を紹介してみたい。リッチー家のversionは、全部で11連からなり、その中の10連が79A、との1連が79Bに由来する。チャイルド79Aの第4連と5連は、ここで次のようになっている。

4. She prayed the wind would never cease,  
Nor troubles in the flood,  
Till her three sons came home to her  
In their own flesh and blood.
5. It fell about the Martinmass time,  
When nights are long and dark,  
This wife's three sons came home to her  
With robes all shining bright.

(4. おかみは祈った。3人の息子たちが血もあり肉もある姿で戻ってこないのなら、風よ、いつまでも吹き続け、浪よ、いつまでも荒れ狂え、と。5. 夜が長くて暗い聖マルティヌス祭のころ、おかみの3人の息子は、光り輝く白衣をつけて帰ってきた。)

これで分かるように原詩のままで意味の通じ難い個所が、少なくともアメリカ人にも分かるように修正されているのである。はじめて文献に顔を出したころから意味不明だった‘fashes’があっさり‘troubles’と言い換えられている。(スティーライ・スパンの演奏やリードの朗読では‘flashes’となっているが、それでも意味ははっきりしない。)また原詩でカバ(birch)の枝で飾られた帽子をかぶっていた3人の息子は、ここでは光り輝くローブを身にまとっている(カバがもつ彼岸的ニュアンスは新世界では通じない)。これはジーン・リッチーの叔父が変えたのか、そのもっと前の段階で変わったのか、その点ははっきりしないが、バラッドのスコットランド色のいわばAmericanizationともいえる。原詩より分かりやすくなった個所は他にある。原詩第8連に“she's ta'en her mantle about”とあり、いちおう「自分の身体をマントにくるみ」と仮訳してみたが、あまり釈然としなかった。リッチー家versionでは、そのところが“(She) placed her mantle over them all”となっており、これならたいへん分かりやすい。もっとも、スコットランド系のバラッドがアメリカへ渡れば、無条件に平易化されるわけではない。伝承につきものの、多くは誤解や誤聞からくる崩れ(corruption)も避け難い。例を挙げてみる。原詩第11連をもう一度引用してみよう。

The cock doth craw, the day doth daw,  
The channerin' worm doth chide;

Gin we be mist out o' our place,  
A sair pain we maun bide.

(おんどりが鳴き、もう夜が明ける。うるさいうじ虫どもが文句をいう。ぼくらが居場所を離れていることが分かったら、痛い目にあわなければならぬ。)

これがリッチーversionの第9連で次のようになっている。

The cock doth crow, the day doth dawn,  
The merry birds doth chide,  
We shall be missed out of our place,  
And we must no longer bide.

(おんどりが鳴き、夜が明ける。  
陽気な小鳥たちが文句をいう。  
私たちのいないことが気づかれよう、  
これ以上とどまるわけにはいかない。)

原詩の‘craw’や‘daw’がもっと分かりやすい‘crow’と‘dawn’になったのは、ありがたいが、原詩での難物だった‘channerin’ worm’(うるさい蛆虫)が‘merry birds’となったのは、どうであろうか。多分、意味不明の‘channerin’ worm’が伝承のどこかの段階で、少なくとも意味の通る‘merry birds’に変えられたのだろうが、どうもこのバラッドの情況からして小鳥のさえずりは場違いのように思われる。(スティーライ・スパンのロックversionでは、この意味不明の‘channering’がそのまま残っている。聴いている現代の聴衆の大部分に分かるはずはないのだが、こういうのは分からぬままでもいいのかもしれない。)

同じく分かり難い第4行も全面的に改められている。‘bide’だけが辛うじて生き残ったが、意味が変わってしまった。伝承バラッドの多くの有する強いスコットランド色が、アメリカへ渡って、このように押さえられ消されていくことは、別段めずらしいことではない。それは伝承として生きていく以上、必然の過程というべきであろう。一字一句違わない伝承というものは、いわば用語矛盾(contradiction in terms)であって、伝承される以上、刻々とその姿を変えていくのがむしろ自然である(と持論を繰り返させてもらおう)。

リッチーversionのもう一つの特色は、チャイルド79Aから1スタンザが入っている点であろう。はじめに紹介したJ.ローリーの朗読のテキストもやはりそうなっていた。リッチーversionとスコットランドのJ.ローリーの朗読テキストが、偶然この点だけで一致したの

か，それとも両者ともチャイルドの79Aでも79Bでもない79C (?) という未記録の version の系統を引くのか，いまのところ確認しえない。

アメリカで報告された「UW のおかみ」のさまざまの version で歌詞がチャイルド79Aを踏襲しているのは，このリッチャー version のみである。しかも，この version が，ケンタッキーのリッチャー族の間で，実際に伝承されていたという点が貴重である。しかし，ジーン・リッチャーが歌う「UW のおかみ」のメロディーについては，厳密な意味で伝承といいかねる点がある。なぜならジーンによれば，叔父のジェーコブは，歌詞を思い出し教えてくれたものの，曲の方は無造作に「これに合う曲はいろいろあるよ」というだけで，ついにはっきりしたことが分からず，ジーンが我流にメロディーにのせて歌うと「そう，それがピッタリだ。そいつに違いない」("Why, sure, that suits it fine. I do believe that's the right one.") といったと伝えられている<sup>5)</sup>。

この叔父の応待ぶりは，ひどくのんきで，ある意味でいい加減のように思われるかもしれないが，伝承バラッドの歌詞とメロディーの組合せには，そういう自由な，融通無碍とさえいえるところがあったに違いないのである。伝承バラッドの中には，このリッチャー家の「UW のおかみ」と同じように，伝承の途中で，メロディーが一時消失したり，変化したりしたケースは数多くあったに違いない。

「UW のおかみ」のチャイルド 79A version (あるいはそれに近いもの) を朗読したり，あるいは歌ったものとして，わたくしの手もとに現在あるのは，以上紹介した6篇である(朗読：ブルックス，ローリー，リード。歌唱：マッキューワン，スティーライ・スパン，ジーン・リッチャー)。マッキューワンとスティーライ・スパンのものは，伝承復活の試みといえても，現実の伝承に基くものとはいえたかった。リッチャー version はアメリカのケンタッキー山間部のリッチャー家に伝わっていたれっきとした伝承バラッドであるが，歌詞はともかくとして，曲の方がこのバラッドに本来付随していたのかどうか，そう窮屈に考える必要はないのかもしれないが，少々こころもとない。

### アメリカ特有の version

「UW のおかみ」が伝承としては英本国で途絶え，かろうじてアメリカにおいて，リッチャー version として

伝承の余命を保っている，という現状である。ところが，アメリカにもう一つ，アメリカ特有の「UW のおかみ」のヴァリアントがあり，伝承としては本国で途絶えてしまったものとは，比較にならないほど，たくましい生命力を示しているのである。このアメリカ版「UW のおかみ」は，せいぜい2つの version しかないチャイルド版あるいはスコットランド版「UW のおかみ」と異なり，多種多様の version を有し，いろいろの題名の下で歌われている。別にアメリカの標準版というものないので，筆者がいちばん聴きなじんでいる A. R. サマーズの version を次にかかげてみる。題して “The Lady Gay.”

1. There was a lady, a lady gay,  
Of children she had three;  
She sent them away to the north country  
To learn high grammerie.
2. They had been gone but a very little time,  
Scarcely three weeks to a day;  
When death, cold death came hastening along  
And stole those babes away.
3. "If there is a king in heaven," she said,  
"That wears the brightest crown;  
Pray send to me my three little babes  
Tonight or in the morning soon."
4. It was just about old Christmas time,  
The night being cold and clear;  
She looked and saw her three little babes  
Come running home to her.
5. She set a table both long and wide,  
Put on it bread and wine;  
"Come eat and drink, my three little babes,  
Come eat and drink of mine."
6. "We do not want your bread, mother dear,  
We do not want your wine;  
For yonder stands our Saviour dear,  
To Him we must resign."
7. She fixed a bed in the long back room,  
Put on it fine white sheets;  
And over it all threw a fine golden cloth  
The better that her babes might sleep.
8. Up rose the eldest one, up in the bed,  
"The cock's a-crowing for the day;  
We're going to never come back again,  
Away and away and away."
9. "Green grass grows over our head, mother,  
Cold clay is under our feet;  
And every tear that you shed for us,  
It wets our winding sheet."<sup>6)</sup>

5) See *Folk Songs of the Southern Appalachians as Sung by Jean Ritchie* (New York : Oak Publications, 1965), p. 75.

(大意：1. 貴婦人がいたが、3人の子持ちだった。その子供たちを北の国へ高等魔術の勉強にやった。2. 子供たちが去ってほんのわずか、3週間しか経っていないのに、冷酷な死が急ぎ足でやってきて、3人の幼児を奪い去った。3. 「もし光り輝く王冠をかぶってる王様が天におられるのなら」と母親はいった「私の3人の子供を今夜か、明日の朝にでも私のところへ寄こして下さい。」4. ちょうど旧クリスマスのころ、夜空が冷え冷えと澄んでいた。みると3人の幼児がわが家へかけ足でもどってくるではないか。5. 母親は長くて広い食卓を整えてパンとブドウ酒を出した。「さあ、お前たちよ、きてお母さんの出すものを飲んだり食べたりしてちょうだい。」6. 「お母さん、パンもいりません、ブドウ酒もいりません。あそこにわたしたちの救世主が待っています。その御許へわたしたちは行かなければなりません。」7. 母親は奥の細長い部屋にベッドを用意し、りっぱな白いシーツをかけた。さらにその上に、幼児たちが少しでも安眠できるように、りっぱな黄金の布をかけた。8. (朝になって)いちばん上の子がベッドから起き上がった。「おんどりが夜明けのときをつくっている。わたしたちは、もう2度と戻ってこれない。はるかかなたへ去っていくのだ。」9. 「母上よ、わたしたちの頭上には緑の草が生い茂っています。足の下は冷めたい土くれです。お母さんがわたしたちのために流す涙の一滴一滴が、わたしたちの経かたびらを濡らすのです。」)

以上みて分かるように、これはチャイルドのスコットランド版よりは、かなり平易になっており、字句のこまかい注記を必要としないであろう。チャイルド版の3人の屈強の息子が、アメリカ版で3人の幼児となっているところが、最初に目につく相違だが、なによりのポイントは、第1連の‘high grammerie’であろう。これには若干の注釈が必要かもしれない。‘grammerie’(O.E.D.の見出しでは‘gramarye’)はスコットランドの古い用法の名残でmagic, enchantmentの意。(‘gramarye’は‘grammar’のスコットランド形であるが、‘grammar’が語源的に魅力、魔力の‘glamour’とつながることは、よく知られている。)母親は子供を世間並みの勉強のために遠国へやったのではない。この点がこのバラッドにとってかなめであるように思われる。第3連の‘brightest crown’をかぶった‘king in heaven’も、わたくしたちが抱く救世主のイメージとへだたってはいるが、民間伝承の神のイメージとしては、さして珍しいものでな

6) *The Lady Gay* sung by Andrew Rowan Summers (Folkways Records, FA 2041), 1954.

く、チョーサーなどにもよく出てくる(たとえば‘The Nun's Priest's Prologue’, l. 30 の‘hevene king’). 第4連の‘old Christmas’は1752年の暦法改正以前のクリスマスで1月6日のこと(この旧クリスマスはアメリカの山間部でかなり長く守られてきた)。これが‘cold Christmas’になってしまったversionもある。第5連の‘bread and wine’はいうまでもなく聖ざん式を連想させる。第7連の‘golden cloth’はアメリカ版の各versionに瀕出するが、その出自がはっきりしない。

サマーズが歌うこのバラッドがチャイルド79番の「UWのおかみ」とかなり明白な相違を有するにかかわらず、両者が根を同じくすることを疑うものはいないだろう。おそらく英本国で記録されることのなかったproto-versionとでもいうべきものがあって、そこからチャイルド79Aと79B、さらにこのアメリカ版が出てきたと考えていいのではないかと思う。アメリカ版には明確なキリスト教的色彩があり、それだけ非キリスト教的(異教的)なチャイルド79番より新しいという見方が一応成り立つかもしれないが、それは皮相の見解で、アメリカ版から後の時代の添加部分(accretion)をはぎ取れば、「UWのおかみ」というバラッドの底に潜んでいる古層がみえてくるようにさえ思えるのである。

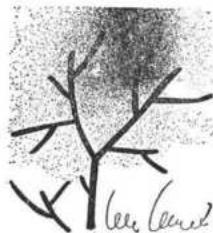
チャイルド教授は、そのバラッド大集成(*English and Scottish Popular Ballads*)の79番の解説で「おかみさんの3人の息子がなぜ戻ってきたのか、その動機が現存している断片(すなわち79Aと79B)の中に見出されない」

(“A motive for the return of the wife's three sons is not found in the fragments which remain to us.”)といっているが、このアメリカ版の最終連が明確にこの「動機」を提示しているといえる。母親の涙が死者の経かたびらを濡らすのだ。過度の悲歎は死者にとって迷惑である——このことを伝えるために3人の子供たちは戻った。それが「動機」なのだ。死者に対する過度の歎きは死者を喜ばせない、というのは伝承バラッドの重要テーマの一つであり、たとえばチャイルド78番の「静かなる墓」にもみられるものである。「UWのおかみ」の底に、このテーマが流れても、少しも不思議でない。ところがチャイルドは前言に続けて「死者がしばしばそうするように、息子たちは母親の強い悲歎を諫止するために戻ったということを示すものは(このバラッドに)なにもない」といて、このバラッドの動機を解明する試みを放棄している。1896年に没したチャイルドは、このアメリカ版「UWのおかみ」のことをまだ知らなかつたのである。

(この稿続く)

(東京大学教授)

# 海外における子女の教育と言語



KOIKE IKUO

小池生夫

## 1. 第3の世代

前号では、「海外における日本人駐在員の動態と英語ショック」という題で、Washington, D.C. の日本人駐在員の社会構造と、彼らの英語についての苦労、またその現地体験にもとづく、わが国の英語教育のあり方についての意見をアンケートから分析した。今季号では、同じくアンケート調査の結果を参考しながら、駐在員たちの子女教育にどのような問題があるか、また子女の日本語と英語習得についてはどうかを、私自身の観察を織りませながら述べてみたい。

昨年、私は海外における子女を「第3の世代」に属する若者たちと呼んで提言をしたことがある。<sup>1)</sup> 戦前から戦中にかけて、大人となり活躍した、現在の60、70代の人たちが第1の世代であるなら、その頃子供だった40代あたりが第2の世代、そして、現在の若者や、子供たちが第3の世代になろう。この世代の人たちの中に、親たちに連れられて海外生活をし、国際性と日本語以外の外国语を相当自由に駆使できる能力を持つに至った人たちが、かなり出現してきている。彼らは、今までの日本人になかった、国際的に通用する力を自然に備えた人間として活躍を期待されるのである。ところが、彼らは、現在、海外諸国の教育の実情とは、相当異なる厳しい日本の受験教育に直面しており、これは、かつてわが国の教育にはなかった新しい問題になっているのである。教育者であり、特に英語教師である私たちにとって、無視できない大きな問題なのである。

本年4月16日付の『朝日新聞』によると、駐在員の同伴子女は現在約16,000人であるという。これは、昭和41年の文部省調査による約4,000人の4倍に当る。また、この数は4年前にくらべて倍増したともいう。このうち、日本人全日制学校生は約6,000人、補習授業校生は約5,400人、そのどちらにも在籍せず、現地の学校のみに通学するか、またはその通学すべき学校えない子女

が4,600人いるといわれる。日本人学校在籍者は5年間に3倍に増えている。またこの数年、毎年3,000人を越える帰国子女がいる。このような数は、今後もうなぎ上りに増えていくであろう。わが国は、海外依存度の異常に高い国情にあり、海外で働く人々をますます必要としているのである。

さて、この帰国子女は、原則として当該学年に編入されるが、これは小・中学校のみであり、高校生の場合、入試を受けていないという理由で編入を拒否されることがあり、また、入れても大学入試を控えていることもあって深刻な問題をひきおこしている。せっかく培った2か国語使用者としての能力と国際性を備えた将来性のある帰国子女を、日本語の能力不足とか、日本式の受験準備の不足とかで締め出し、「日本国内で仕事で成功する唯一のチャンスを与えてくれる教育から切り離し、帰国子女が習った言葉で入試を受けられなくしている融通のきかんさの真の被害者は、結局、帰国学生ではなく、当の日本かもしれない。なぜなら、経済安定のためにかくも圧倒的に外の世界に頼る社会が、その世界にもっとも通じる市民を差別しているからである。この社会のやり方が、自分の利益に合致しているとはとうてい思われないのである。」<sup>2)</sup>

## 2. Washington, D.C. の「日本語学校」と子女教育

この帰国子女の受け入れ体制は、質量ともに後手を踏んできたが、文部省、海外子女教育財団、都道府県教育委員会、一部の私立学校などの努力で次第に改善されつつある。一方、海外における子女教育も、全日制学校46、補習授業校55<sup>3)</sup>と拡充されてきている。ここでは、

2) 佐藤弘毅「海外勤務者子女教育の概要と若干の事例研究」『教育研究』Vol. 4、京浜女子大紀要（昭和51年1月）中の『読売新聞』（50年7月23日）“評判悪い日本の教育”（『ニュース・ウイーク』誌記事の要約）を適宜使用させていただいた。

3) 海外子女教育振興財団『海外子女教育』1976年2月号参照。

1) 「第3の世代—その国際性と語学力の維持」“海外子女教育”，No. 32，海外子女教育振興財団，1975年10月。

Washington, D. C. 日本語学校在籍者数（昭和49年5月）

	男	女	計
小学校	1年	11	13
	2年	16	6
	3年	10	11
	4年	5	11
	5年	7	5
	6年	7	8
	小計	56	54
中学校	1年	3	14
	2年	0	4
	3年	0	4
	小計	3	22
高等学校	1年	0	5
	2年	1	4
	3年	1	2
	小計	2	11
	合計	61	87
教員		3	10
幹事		0	4
運営委員		11	0
			11

私が関係していた Washington, D. C. 日本語学校をその一例として紹介し、どのような問題が子女教育についてあるかを述べたい。

現在 Washington, D. C. には、New York<sup>4)</sup> や他の諸都市と同じように、土曜日のみ開校している補習学校があり、「ワシントンD. C. 日本語学校」と呼んでいる。運営母体は父兄である。父兄の代表が運営委員会を構成し、運営の大綱を決めるが、日常の業務は、昭和49年秋より配属された派遣教員1名、および父兄の幹事(母親)が行なう。入学者は原則として日本語に堪能でやがて帰国する者を対象にし、隨時入・退学を行なっている。入・退学者は頻繁で、年間50名ぐらいになるが、総体的に言って、入学者が増加する一方であり、昭和50年10月には在籍者が176名になった。これは、小学校課程在籍者のみが28名増えた結果による。教員は、原則として教員免許状を取得し、教育経験がある人を現地採用しているが、幸にして、かなり質の高い水準を維持することができている。家庭の主婦が多く、ついで、職業をもっている女性、大学生が採用されている。財政基盤は、父兄負担による授業料のほかに、外務省、文部省、海外子女教育振興財團等より、校舎借用料、教員謝金一部負担金、

4) New York には、最近、全日制の日本人学校が1つ実験的開校された。

教科書無償配布などの援助による。

さて、生徒、児童は、アンケート調査によれば、Washington, D. C. とその近郊に在住の学齢期の子供の約65%が通っていると思われる。帰国後の適応、特に日本語の維持と学科の遅れを少しでも埋めるためである。その効果については、期待以上だと考える人(48%)と、まあまあだとする人(52%)がいるが、価値がないと思う人はいない。日本語で自由に学び、遊べる数少ない機会だと喜ぶ子供が多い半面、日本語がよくわからなくて、親におこられながら、出ている子供たちも若干いる。在籍者数の分布表を見るとわかるように、男女の比率が均衡がとれているのは小学校児童までである。中学、高校では、まず在籍者数が大きく減ってしまう。父兄の年配者が比較的少ないとすることもあるが、男子がほとんどいないということを見てもわかるように、男の子を単身帰国させたり、赴任の時から日本に残留せたりする例が非常に多いのである。高校生、中学上級生で現地に在留する者は、America の大学進学を目指していることが多い。America では、学校の内申書が大切であり、推薦状が重要である。校長、担任、boy scout の隊長などの推薦状は実質的なもので嘘がない。また、大学資格試験という全国的な範囲で実施される試験の成績が大切である。したがって、日本の大学入試とは準備がちがう。男の子は日本の大学を卒業させた方がよいという配慮から、単身帰国させるが、女の子はそれほど厳しさがないことから親と同居させることが多くなる。

日本語学校では、国語と数学を2時間づつ、社会を1時間半教える。このための予習は金曜日の夜だけということが普通である。後の5日間は、現地の学校に行く関係から、その宿題をやらなければならず、第一、最初の半年は、何が何だかよくわからないのである。宿題は上級学年になるほどきびしく、特に高校は、かなりやらされる。Shakespeare の劇を2、3時間の授業で1つこなし、それについて、essay を書き、discussion に参加させるのは普通のことである。両方の学校に通うことは、厳しいことなのである。class は、Washington, D. C. に来たばかりの子供と、2、3歳で来て日本語があやふやな子供の両極を軸に授業が進められるわけで、先生も生徒も、親も、日本ではわからない苦労をする。数学では計算練習が時間的にできないし、社会科では、America で、東京の魚市場のことを教えることのむなしさを感じるのである。国語でもっとも困るのは、漢字の読み書きであり、上級学年では古典の読解である。また、校舎問題では頭を痛める。現在、公立小学校を借用してい

るが、借用にあたっての条件は、教室内の物品は一切現状保存のまま、終了時に返却することである。このため、黒板に字がいっぱい書いてあっても、消すことが許されず、小黒板を日本語学校で用意し、それを使わなければならぬ。机の中にいっぱい入っている教科書、文房具類にも手をつけてはいけないし、机や椅子そのものの位置も元にもどさなければならぬのである。神経を使うことは大変なものである。さらに、America の授業日数と日本の授業日数がちがっており、America 側で、夏休み期間中に校舎を閉鎖してしまうために、日本語学校側では、他の施設をみつけなければならず困りはてるのである。このような事は、世界各地の事情によって、さまざまな問題があるうちの一例にすぎない。日本国内では想像もつかない、あるいは理解できない問題で、現地の当事者は苦労している。

親たちは、子女の帰国後の教育についてどのように考え、どのような準備をしているだろうか。アンケートによると、帰国後の学習や進学について

全然心配していない	16人 (41.0%)
多少心配している	23人 (59.0%)

となっているが、中・高校生、および小学校5、6年生の親たちは不安の中で真剣そのものである。しかも受け入れ体制についての情報を正確に把握している人は少なく(4.8%)、大体知っている(34.7%)、少しあは知っている(26.5%)、全然知らない(34.7%)という有様である。

帰国後の用意としては、

日本語学校に通わせる	30人 (65.2%)
日本から学習参考書や雑誌、本などをとりよせる	22 (47.8)
海外女子教育財団の通信教育を受けさせている	10 (21.7)
帰国後の受け入れや教育一般についての巡回指導教員の懇談会によく出席する	6 (13.0)
全然何もやらない	13 (28.3)

となっている。また、日本語学校のあるべき姿として、よく問題になるのはカリキュラムである。つまり、完全な日本式にあうように全日制の学校を作る(8.3%)か、教育のレベルが高いといわれる D.C. 郊外の学校に通わせながら、土曜日だけの学校という体制を維持する(63.9%)か、授業面ばかりでなく課外活動も行なう(33.3%)かなどいろいろな意見があるが、今後の研究課題であろう。現地の受け入れはどうなっているだろうか。アンケートによると、日本人子女で排斥された者は一人もなく、どこの学校でも歓迎され、親切にしてもらっているといふ。また英語の習得を学校側が援助しているところもある。たとえば、私の子供たちが通っていた Virginia 州

の Alexandria City の公立小学校では、外国人のための英語教室を週に 2 回授業中に開いており、数校の生徒が bus で一校に集まり授業を受けていた。このような補習 class に通う子供は 31.8%，その他に、class の中で、特に先生が指導してくれる場合 11.4%，また、通常行なわれている Reading の class が能力別になっているために、grade をおとしている場合 6.8%，その他があるが、特別の指導は受けない生徒が 52.3% もいて、まだ十分に ESOL は発展していないと思われた。WATESOL といって、TESOL の Washington, D.C. 支部が活発に活動しているこの地域でも改善の余地はあるようである。こうして、子供たちが、次第に授業についていくようになるには 1 年はかかる。

### 3. 子女の英語習得と日本語の維持

#### 3.1. 英語の習得

さて、子供の英語習得はどのようにして行なわれるか。アンケートの結果を参考にしながら、私自身の観察をまじえて述べてみよう。

一般に、子供は例外なく英語を自然に習得する。しかし、細かく観察すると、習得の型は、本人の年齢、滞在期間、まわりの環境、能力、性格、性、意欲、指導などの諸要素によって少しずつ異なるようである。まず、子供の英語力をごく一般的に親が観察した結果を表にしてみる。

Speaking, Hearing	子供
全然わからない	16人 (15.0%)
やさしい表現がわかる、単語程度を表現する	26 (24.3)
相手のことは半分ぐらい理解、簡単な文をつくる	18 (16.8)
大体理解できる、どうやら自分の言いたいことを言っている	18 (16.8)
アメリカ人の同年代の子供とまったく同じにやれる	29 (27.1)
計	107人
Reading, Writing	子供
全然できない	39人 (38.6%)
ごくやさしい単語や文を理解、多少書ける	19 (18.8)
同年代のアメリカ人にくらべて半分ぐらいの能力	12 (11.9)
アメリカの子供とくらべて多少能力がおちる	11 (10.9)
アメリカの子供とまったく同じ	20 (19.8)
計	101人

上の 2 表から言えることは、子供たちは Speaking, Hearing の能力にすぐれているが、Reading, Writing は

格段におとることである。これは、英語の習得が、耳と口を中心に行なわれることを示しており、それに対し、Reading や Writing は受け入れ先の学校の授業に頼るが、ふれる機会ははるかに少ないし、また知的能力を必要とすることによると思われる所以、この結果が出るのは当然であろう。子供が2人兄弟（姉妹）でいる場合は、年齢が上の子供が習得が先行するように見えるが、有意差があるかどうかはわからない。

「性格と英語習得との関係があると思いますか」という質問に対して、「あり」と答えた人は23人（74.2%）、「なし」は8人（25.8%）であった。「内向的であっても、注意力、集中力があれば上達する。積極的であるにこしたことはない」、「幼児は遊びに夢中になるので、性格よりも遊ぶ機会の多いか少ないかが英語の進歩と関係がある」と書いてくれた人もある。

さて、ここで私は年齢や滞在期間、性格、遊びの機会などを総合的にとらえて、分析した結果、次のようなことが言えるのではないかと思う。

一般に、子供は、滞在期間6か月から1年にかけての期間では、ごくやさしい英語を聞いて理解できるが、自分の意志をまとった英語にして表現はできない。単語を若干まとめて言える程度であろう。日本語を代謝作用として使いたがる。半年をすぎて1年ぐらいで、相手の言う内容を理解することが半分ぐらいはできる。言いたいことも何とか文の型をとってできるようになる。1年から1年半ぐらいでは、Speaking, Hearing で、やさしいことなら一通り理解し、話すことができるようになる。アメリカ人なみにできる子供もでてくる。Reading, Writing は、同年齢の子供並みに達するには少し無理である。特に12, 3歳から17歳ぐらいの子供は内容や語彙のこともある、大変である。しかし5, 6歳から8, 9歳の子供の場合は、アメリカ人並みになることは可能である。2年ぐらいをすぎると、もうアメリカ人並みの能力を持つのが一般的で、日本語よりも英語が使いやすくなる。3年ぐらいになると、ほとんどの子供は、現地の同年齢の子供並みの言語能力になる。

性格が、内気で、恥ずかしがり屋の子供は、積極的で活発な子供にくらべて英語習得の進度がおちると思われる。しかし、そういうことよりも、もっと大切なことは、注意力と持続力があるということであろう。また、同年齢で性が同じ友人を近所に持ち、常に遊んでいる状態が子供にとって、めぐまれた環境である。私の観察では、英語の習得は4, 5歳から10歳ぐらいまでとそれ以上の年齢では、多少型が変わるものである。前者の場合、本人の自意識がまだはっきりせず、耳に入った英語

を、そのままどんどん吸収し、使うことを恐れない。おそらく、日本語、英語というはっきり異った2言語ということを意識せず、場面に応じて使いわけることもあり意識しない。したがって、日本語と英語を並立させるよりも、英語が使えるようになれば、どんどん英語に変わってしまう。この意味で、2か国語併用の時期に、適切な指導がなされないと、その期間は短いことになってしまう。それ以上になると、年齢が高くなるにつれ、分析力、総合力、判断力がつき、論理的にものを考え、自己意識もはっきりしてくる。英語でならう教科内容も程度が高くなっていくために、最初は英語になれないと、なれてくると、日本語を維持しながら、英語習得の速度がぐんと増す。場面に応じ、英語と日本語を使いわけられるようになる。いずれの年齢においても、日本語と英語の間に翻訳が効くという習得の仕方ではない。英語は英語として理解するので、行動から受ける印象も、英語を使う時と、日本語を使う時では違ってくる。年齢が高い子供は、英語に接して、意味を直ちに理解できる場合はよいとして、はっきりしない時に、日本語にたよることがある。いわゆる干渉がおきる。しかし、意味がはっきりつかめるようになると、英語だけを利用するようになり、日本語の回路は使わない。英語だけの世界になる。このような印象を私はアンケート調査と、多くの子供を観察して持つようになった。勿論、この印象が正しいか、間違っているかは、今後の研究に期待しなければならない。

### 3.2. 日本語の維持

子供たちにとって、日本語の維持は重要な問題であり、それは、親の方がより強く認識していることである。まず、親の観察をアンケートからさぐってみよう。

子供は日本語と英語ではどちらが使いやすいか

	Speaking, Hearing	Reading, Writing
日本語がずっと使いやすい	54人 (57.4%)	43人 (54.4%)
どちらかというと日本語	9 (9.6)	8 (10.1)
どちらも同じように使う	13 (13.8)	4 (5.1)
どちらかというと英語	2 (2.2)	5 (6.3)
英語がずっと使いやすい	16 (17.0)	19 (24.1)
計	94人	79人

この表によると、日本語がずっと使いやすい子供と、英語が使いやすい子供の両極端が多くて、中間が少ない。なかなか bilingual にはなれないようである。日本語が楽な子供たちが、ずっと多いのであるが、これは Washington, D.C. 滞在がそれほど長くない子供が多いからであろう。しかし、英語が楽だとする子供も2割前

後いる。長期滞在者の子女であろうと考えられる。このように、日本語を維持しながら、英語も上手になろうということは、むずかしいことなのである。実際、親の話す日本語を理解しながらも、子供は親に英語でしか返事しない例は少なくない。はじめから、家庭では日本語を使うことにしてあっても、子供の使うことばに英語がどんどん入ってくるのを防ぐことができないことが多い。この傾向は、子供が小さい時で、滞在期間が2年を過ぎたころからあらわれるのが一般である。まず、名詞、形容詞などの単語を英語に置きかえ出す。ついで、動詞が英語にかわり出すと、ここで、何も対策を講じなければ、文のレベルが入ってくる。その前に、漢字の維持はなかなかできないという現象がおきている。小さい子供は、新しい世界に接することが多く、そこでおぼえる単語は、英語で入ることが多い。当然、単語に伴って来る文化も日本語文化とは縁遠くなる。日本語がわかるには、日本文化の中にわが身を置くことが一番で、その日本文化や日本の生活、社会の外で習得しようとする日本語や日本文化は実像と結びつかない虚構の世界となる。この世界で日本語を維持し発展させることは、子供たちは、どうも不得意なのである。実像は、やはり、子供たちのまわりにある英語であり、アメリカ文化なのである。週に1回だけの日本語学校の日本語よりも、週に5回のアメリカの学校、近所の友だち、アメリカそのものの環境の中に入れば、日本語自体まだしっかりしない子供たちは、どんどん日本語を失うのが当然であろう。年齢が14、5歳であっても、別種の人間ではない。似たような現象がおきる。しかし、帰国後は、これが大問題になってくるのである。親たちは、いろいろな対策を考えざるを得なくなる。日本語学校に行かせることは勿論として、日本の雑誌や本を取り寄せたり、借りたりする(回答者の47.9%), 家庭では日本語を使う(37.5%), 通信添削をやる、日本語のワークブックをやる、教科書を毎日親が教える、日本人の子供とよく遊ばせるようにする、などは、その一例である。学齢期以前の子供をもつ親は気が楽であるが、小学校以上の子供をもつ親は気にかかる問題である。それでも、両親は日本語を家庭で使うのに、子供は英語を使うと答えた人は、回答者48人のうち16人(33.3%)に達している。この中で、私の記憶に残る成功例がある。それは、アメリカで生まれた子供たちであるが、その子供たちを小学校の4年生頃から日本に母親が伴って連れて行き、公立の小学校に半年ほど入れる、夏休みなどは日本に連れて行き、旅行をやったり、勉強をさせる。家庭では、幼児期から絶対に英語を使わせない。読み書きを日課として教える。それを兄弟

に一様に課す。勿論、日本語教育に役立つ施設、書物はどんどん利用する。大学は日本で教育を受けさせる。まさに徹底したやり方であるが、この場合、見事に成功している。その裏にある努力は親子共に並大抵ではないが、この親子は、それを楽しんでいるのである。見事といわねばなるまい。

以上で、海外子女教育の実情を、子女たちの現地語である英語の習得と、日本語の維持の問題について、アンケートの分析と、自分の観察の結果から印象を述べた。海外から帰国してくる子供たちの受け入れ体制は、今後ともに整備されなければならない。研究もされなければならない。しかし、完成に近づくには時間が相当かかるだろう。ここに現在でもやれることがある。それは、この子供たちを教える教師の心構えであり、それは未開拓の分野へのあくなき好奇心と挑戦である。特に、この子供たちの背景を多少なりとも察することができる英語教師こそ、彼らのよき相談相手になる資格がある。生徒の方が発音もうまく、英語もできるのではないか、などと自嘲しているようなことがあってはならない。次回は日本人の社会生活とアメリカ人の価値観の分析をテーマに扱ってみたい。

(慶應義塾大学助教授)

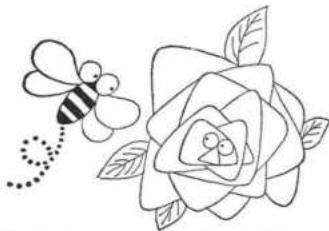
#### (p. 40 よりつづき)

似合いの夫婦はなかなかいないということであるが、日本にも「合わせ物は離れ者」というのがある。うまくいかない夫婦にならないためには、夫婦お互いに理解と努力が必要なのだろうが、諺は男女両性に責任を負わせて公平である。まず男性側からの A good husband makes a good wife. (良き夫は良き妻をつくる)は、言うまでもなく、夫が親切で思いやりがあれば、妻も明るくなつて身勝手でなくなるということを表わしている。この諺は、さらに一般化されて、人によくしてやれば人からもよくしてもらえるという意味に発展する。A good Jack makes a good Jill. も同じように、妻は夫次第、ということを表わしているが、この場合にも、良い主人のもとには良い使用人が生まれる、とか、目下の者は目上の者の態度、作法を模倣する、という意味も合わせ持っている。A good wife makes a good husband. (良き妻は良き夫をつくる)は、夫は妻次第、である。さらにもうひとつ、Show me thy wife and I will tell thee what a husband thou art. (妻を見ればどういう夫であるかわかる)をつけ加えておきたい。

(静岡県立清水東高校教諭)

## ポップ・ミュージックとマザー・グース

—ビートルズの場合—



NAKAMURA KEI

中村敬

本誌 No. 52 で平野敬一氏が「Mother Goose の一応の知識がなかったら現代の folk song など、そうビートルズにしてもそうですが、その本当の味わいが分るはずがない、といいたくなりますね」と述べている。まさに正鶴を得た発言と思う。

そのビートルズが、未だ一部ではあるが、我国の知識人の間で、近年ようやく市民権を獲得し始めたように思われる。雑誌では『ユリーカ』(Vol. 5-1, 1973) の「特集ビートルズ」を代表格とし、単行本では、庄司英樹著『ビートルズの復活』(二見書房, 49年) などこれまたかなりの数に達する。一方、翻訳となると片岡義男氏の手になるビートルズの歌詞の全訳が角川文庫に 2 冊本で入っているほか、Penguin に入っている *Lennon Remembers* (1973) が片岡氏の手で『ビートルズ革命』(草思社) として訳出され、ジョン・レノンを知る上で——あるいは広くビートルズを知る上で——必読の書と思われるジョン・レノンの *In His Own Write* (Jonathan Cape, 1964) がこれまた片岡氏によって「マザー・グース」のパロディーである「レノン・グース」というはなはだ witty な副題を付け『絵本ジョン・レノンセンス』(晶文社) として近年訳出された。

しかし、こうした外部の動きとは対象的に英語教育界では、筆者の知る限り、ほとんど全くといってよいほど、ビートルズはもちろん、folk song 一般についてもたいして話題にはなってこなかったと思われる。英詩が高等学校段階までのレベルで不當に冷遇されているのと同じように、彼らもまたこの國の英語教育界においては当分市民権を獲得できないのかも知れない。

こうしたこととことさら話題にするのは、ひとつにはビートルズを代表とする現代のいくつかの pop song が、英語文化の特質を何よりも象徴的に示しているからである。いささか乱暴ないい方だが国民教育としての英語教育は文化を無視しては成り立たないというのが、筆者の年来の主張であるが、こうしたセオリーを敷衍して

行くと、英語文化の本質的部分を象徴的に示しているビートルズや他の folk song になれ親しみ、あるいは研究することが、英語文化を知る有効な手段のひとつになり得ないはずがないと思われる。

さらにもうひとつの理由は、この 3 月まで 1 年半ほど文化放送で *Sing Along* を担当した体験による。若者の間でビートルズは決して死んではいないとつくづく思ったのは、1 年半を通して絶えず request が送られてきたのがビートルズであり、放送に対する response がビートルズの時が最も知的で活気があった。これはひとつにはビートルズには語る内容がそれだけあるからだろう。また Simon & Garfunkel や Bob Dylan のうたのように、語る内容の豊富なうたに対しては必ずといってよいほど打てば響くように、反論やら意見がよせられた。何故ビートルズや Simon & Garfunkel などの pop music がかくも彼ら若者の心をとらえるかということは、それ自体興味あるテーマであるが、ここでは folk music の世界を英語教育のいわゆる 'sub-culture' の位置にとどめておくべきではないということだけを指摘しておけば充分であろう。

それでは、いったいビートルズや modern pop music の一部が英語文化の本質的部分とどこでどのようにつながっているのか。それは要するに「遊び」ということばで要約できるように思われる。もちろん、日本文化にも「遊び」はある。しかし、日本では「遊び」、とりわけその一部である「笑」は、英語文化に比べ今もって十分市民権を獲得してはいない。「全力的」と「純粹」を日本人の人世観や世界観の基本であると看破したのは古川哲史氏 (cf.『日本的求道心』理想社) であるが、そうした精神風土では「遊び」はいつも negative な価値しか与えられない。一方英語文化では「遊び」の判らぬ、つまり sense of humour のない人間は boring な人間として軽蔑されるほど「遊び」がプラスの価値として評価されている。実際、彼らにとっては、およそ規則性、

娯楽性、対抗性がそなわった人間社会の事象はことごとく **game** となる。したがって政治・経済・ことばの遊びはもちろんのこと、我々日本人にはいささかとうつだが、「言語教育」も language teaching **game** であり、恋愛だって Love was such an easy **game** to play. (Beatles: "Yesterday") となる。つまり、彼らにとって人生そのものが **game** なのである。

ところで、こうした **game** の精神構造の大切な部分がもっとも象徴的に具現されている英語文化の遺産が Mother Goose であり、それは Alice の世界に通じ、ピートルズを代表とする現代の folk song にまでめんめんと尾を引いている。冒頭に引用した平野氏のことばに筆者が共鳴するのは、まさにこの意味においてである。

本誌の同じ号で高橋康也氏は Mother Goose のうたの特徴を内容面から極く大雑把にいって3つに分類した。第1は「混沌」、第2は「逆転の論理」、第3に「古典的『帰謬法』の応用」である。この分類はまことに当を得たものと思われる所以、ここではまずピートルズのうたから、以上の category に相当するものを一例ずつ挙げて、ピートルズと Mother Goose の係わりを例証して見たい。

第1の「混沌」の世界（あるいはいかなる論理も拒否した童話の世界）を示すうたとして、高橋氏の挙げているうたは――

Hey diddle-diddle,  
The cat and the fiddle,  
The cow jumped over the moon,  
The little dog laughed  
To see such sport,  
And the dish ran away with the spoon.

こうした大人の常識・論理をはずした「先天的秩序の不在」を示す世界は、ピートルズでは "Lucy in the Sky with Diamonds" に共鳴する。

Picture yourself in a boat on a river,  
With tangerine trees and marmalade skies,  
Somebody calls you, you answer quite slowly,  
A girl with Kaleidoscope eyes.  
Cellophane flowers of yellow and green,  
Towering over your head.

(中略)

Follow her down to a bridge by a fountain,  
Where rocking horse people eat marshmallow

pies,  
Everyone smiles as you drift past the flowers,  
That grow so incredibly high.  
(後略)

"Lucy in the Sky with Diamonds" は LSD を連想させ、それについてもうさい議論がある。実際、例えば「黄色と緑色のセロファンの花が空高く生えていたり、「振り馬の人間がマシマロのパイを食べてい」たりする風景は LSD を連想させるに十分ではある。しかし、ならば、「雌牛が月をとび越えた」り、「皿がスプーンをくわえて逃げ出した」りする Mother Goose の世界こそ本質的に LSD の世界であるといえまい。

第2の「論理的」逆転において最も徹底したうたとして氏の挙げているうたは――

Three children sliding on the ice  
Upon a summer's day,  
As it fell out they all fell in,  
The rest they ran away.  
(以下略)

この「逆転の論理」は、『鏡の国のアリス』の中で Tweedledee がうたい出すうた、"The Walrus and the Carpenter" の冒頭の一節に共鳴する。

The sun was shining on the sea,  
Shining with all his might:  
He did his very best to make  
The billows smooth and bright—  
And this was odd, because it was  
The middle of the night.

こうした日常の論理の裏返しや、あるいはまったく矛盾する世界のぶつかり合いから生ずる「楽しさ」あるいは「おかしさ」は、英國的常識と論理からの解放を志向した彼らのうたの世界にも当然のこととして顔を出す。彼らのうたの中でも難物中の難物 "I am the Walrus" の中の問題の個所だけを引用する。

Sitting in an English garden waiting for the sun,  
If the sun don't come,  
You get a tan from standing in the English rain.  
I am the eggman, they are the eggmen....

第3はいわゆる self-evident、つまり自明の理であり、

「論理的因果関係を金科玉条とする近代的大人的思考への風刺」を示す世界として氏が挙げているうたは――

There was an old woman  
Liv'd under a hill,  
And if she isn't gone,  
She lives there still.

ちなみに、*The Annotated Mother Goose*, MERIDIAN, p. 31 には、folk singer の Burl Ives によって一般化した “The Foggy, Foggy Dew” の冒頭の 2 行——When I was a bach'lor/I lived all alone.... が、Mother Goose の When I was a little boy, I liv'd by my self.... からの echo として挙げてある。この parody も、一時代までは完全に self-evident な statement であったろう。

さて、この単純かつ明快な「論理」——自明の理——の世界がビートルズのうたではどのように受け継がれているだろうか。ビートルズのうたはごく大雑把にいって 2 つのカテゴリーに分類できる。第 1 は *Yesterday/I Want to Hold your Hand/Nobody I Know* のような love song の系列に属するものである。第 2 は *I am the Walrus/Lucy in the Sky with Diamonds*, などのようにナソンセンスの世界をうたった系列のものである。当然のことながら、Mother Goose の世界は、第 2 の系列のうたに、より大きな影響を与えていたように思われる。しかし、love song の中にも Mother Goose そのものの世界を想像させずにはおかしいものがある。例えば、“All You Need is Love”(「愛こそすべて」)は次のようなことばで始まる。

Love, love, love....  
Nothing you can do that can't be done,  
Nothing you can sing that can't be sung,  
Nothing you can say that you can't learn,  
How to play the game, it's easy.

Nothing you can make that can't be made,  
None you can save that can't be saved,  
Nothing you can do that you can't learn,  
(以下略)

「できないことはできない」、「歌えないものは歌えない」、「覚えられないことはいえない」、「作ることができないものは作れない」——まさに自明の理という外いいようのない message である。これはもう完全にマザー・グースの世界といえるだろう。なお、片岡義男氏はこの

部分を「やれないことはなにひとつない」(つまり、愛さえあればできないものは何もない) というように、全面的に二重否定的解釈を下しておられるが (cf.『ビートルズ詩集』角川文庫), それでは Mother Goose の世界からは遠く隔った解釈であるように思われる。できないことはできないのであるから無理をするな、必要なのは愛だけだ、愛さえあれば何もできなくても生きて行くのに心配はいらぬ (How to play the game, it's easy) というのがこの歌の主題なのである。

ところで、Mother Goose が描き出す世界の特徴を形態、あるいは形式的な側面から、(1) riddle, (2) tongue twister, (3) counting, (4) wise saying, (5) charm, (6) almanack, 等 (cf. *The Annotated Mother Goose*) のように類別化することも可能であるが、こうした形式もビートルズのうたに微妙に影響を与えている。例えば (3) の例を Mother Goose から拾うと――

One, two, three,  
I love coffee,  
And Billy loves tea,  
How good you be,  
One, two, three,  
I love coffee,  
And Billy loves tea.

ちなみに、この種のうたは counting-out rhyme と称され、(鬼ごっこなどの) 鬼をきめる時にうたううたである。ビートルズのうたにもこの形式の影響を受けたものが無数にあるが、次の *All Together Now* はその代表的なものである。冒頭の一節だけ引用する。

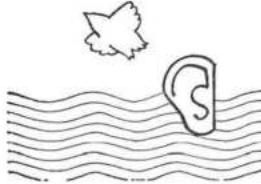
1, 2, 3, 4, can I have a little more?  
5, 6, 7, 8, 9, 10, I love you.  
A, B, C, D, can I bring my friend to tea?  
E, F, G, H, I, J, I love you.

以上ビートルズについてのみとり挙げたが、平野氏も指摘する Simon and Garfunkel にも、そして Bob Dylan にも Mother Goose の影響が強く出ている。両者に共通して使われている例をひとつだけ挙げれば、例の *Who Killed Cock Robin?* を下敷にして、前者が “Sparrow” を、後者が “Who Killed Davey Moore?” を作った。特に前者の作品の象徴性は充分に我々の知的好奇心を満足させてくれる。最後に S & G の “Scarborough Fair” と Mother Goose の関係については、『現代英語教育』(研究社) の 4 月号で比較的詳しく触れておいたことを付言しておきたい。

(成城大学助教授)

# 英語の諺(その3)

—結婚と夫婦—



TODA

YUTAKA

戸 田

豊

恋愛についてはあらためて章を設けるとして、結婚について諺はどういうことを述べているかを見たい。女性の獲得方法、結婚とはどういうものか、結婚にあたっての注意など、諺は日常生活では口にしにくいことをはっきりと主張する。人間の知恵と経験を簡略に集約したのが諺であるとすれば、諺が結婚についてどういう判断を下しているかを知っておくのも大事なことである。

**Faint heart never won fair lady.**

男性に向って諺は、Faint heart never won fair lady. (小心者が美女を得たためしがない) と言う。この諺は 1552 年の A cowarde verely neuer obteyned the loue of a fayre lady. をもって最初の用例とするが、'Faint heart....' と最初の 2 語を言っただけでも通ずるほど普及していたことは、1624 年の用例でこの言いまわしに 'stale' (新味のない) というらしく印が押されていることからもわかる。この諺の意味は、美人を得るには押しがかんじんということだが、いつ、どこで、どのように決定的なことばを吐こうかと迷いに迷っている青年に向って言われる励ましのことばである。当の青年にとっては生涯におけるもっとも重大な決定的瞬間にになりかねないことだけにためらいの気持が生ずるのも無理はない。Faint heart never won castle. (弱気が城を落としたためしがない) という表現もある。これら 2 つの表現は knight (騎士) 向けて言われたことがわかる。また、美女とか城とかぎらす貴重なものはなんでも勇気と自信がなければ得られるものではない、という一般的な意味もこの諺には生じている。John Dryden (1631—1700) の Alexander's Feast に出てくる None but the brave deserves the fair. (勇気のある人以外はだれも美女を得るに値しない) も同じ内容を持っている。He who hesitates is lost. (二の足を踏む者は負ける)とも言われる。強引に言い寄れば美人でも陥落するのだから、求婚をびくびくためらうことはない、堂々と申し入れるべし、ということである。Fortune favours the bold [hardy, valiant, brave]. (幸運は勇者に味方す

る), Nothing venture, nothing gain [have]. (危険を冒さなければ何も手に入らない), Nothing stake, nothing draw. (何も賭けなければ何も集まらない) などは求婚とは直接に結びつかなくても一脈相通ずるものはある。女性攻略の一例として、諺は、娘を手に入れようとするならまずその母親の歓心を買うことであるとして、He that would the daughter win, must with the mother first begin. (娘を手に入れたければまずその母親から始めなければいけない) をあげている。まさに、「将を得んとすれば馬を射よ」である。女が男の強引さには弱いということを、The woman that [who] deliberates [hesitates] is lost. (ためらう女は結局負ける) は示している。申し出を受けてすぐには拒むこともできずにどうしようかと迷う女は結局くどき落とされるということを表わしている。この the woman が he とか the person に変わると、一般的に熟慮、躊躇を批難する意味になる。女性だと思ってあなどってはいけない、求婚するにも、結婚を断念するにも紳士的でなければいけない。Hell has no fury like a woman scorned. (ふられた女の怒りほどすさまじいものはない) という諺がある。これは William Congreve (1670—1729) の The Mourning Bride の一節である Heaven has no rage, like love to hatred turned, Nor Hell a fury, like a woman scorned. に由来している。その意味は、男性が縁を切った時に愛情が憎悪に変わった女性の怒りほどすさまじいものは天国にも地獄にもない、ということである。

**Marriage is a lottery.**

Marriages are made in heaven. (結婚は天上で作られる) は、だれがだれと結婚するかは神の定めによるものであるということを表わしている。言いかえると、結婚は人間の力の及ばない偶然によって支配されるということである。本当にこれを信じ込んで、結婚について真剣に思いめぐらすことがなかったら一体どうなるだろうか。偶然に頼り過ぎる結婚は大きな危険をおかすこと

なる。結婚が良かったか悪かったは生活を共に送ってみないとわからないために、配偶者選択の運、不運の責任を神に転嫁しているとも考えられる。Marriage is destiny. (結婚は神意によって決まる) も同じ発想である。Marriage is a lottery. (結婚はくじのようなもの) は、配偶者がどういう人になるかは前もってわからないのだから、結婚による幸、不幸は結局運次第であるということを示している。これらの諺は、「出雲の神の縁結び」、「縁は異なるもの味なもの」という日本の諺に類似している。

#### A young man married is a young man marred.

早婚と年上の女と結婚したことで苦い思いをしたと思われるのはシェイクスピアである。18歳で26歳の女と結婚し、20歳ではやくも3児の父親となっている。それから2年ほどして妻子を故郷に残してロンドンに出る。その時にかれの胸のうちには、A young man married is a young man marred. (若くして結婚した人は若くしてだめになる人だ) の思いが去來したであろう。若くて結婚人生の欠損、若くて妻帯わが身の災難である。この詩人、劇作家と妻との間がうまくいかなかったであろうと推測されるものは1616年3月に署名した長い遺言書である。妻の Anne には 'my second best bed' を与えるとしか書いていない。30年間もの長い間いなかにおきっぱなしにして、子供の面倒をみさせておきながら、遺産分配においては妻にはこれだけである。かれの妻に対する憤懣をぶちまけたものと考えられないこともない。早婚は人を台なしにするという A young man married is a young man marred. は、かれの *All's Well That End's Well* の2幕3場で用いられている。同じ内容の諺である Marry in haste, and repent at leisure. (あわてて結婚して、ゆっくり後悔するがよい) はシェイクスピア以前にすでにあったが、かれ自身も 3 *Henry VI* IV. i. 18 で Hasty marriage seldom proveth well. (あわてた結婚はまずうまくいかない) と言っている。The *Taming of the Shrew* III. ii. 10 でも同様なことを述べている。急いで結婚すればあとで長い間後悔することを、シェイクスピアは身をもって味わい作品中に表わしたのである。「せいては事を仕損じる」の結婚の場合の例証である。The chief cause of divorce is marriage. (離婚の主因は結婚にあり) は皮肉まじりの真理を一部に含む現代の諺である。Wedlock is a padlock. (結婚はなんきん錠をかけられるようなもの) と言われる。Francis Bacon (1561—1626) は、*Of Marriage and Single Life* において、He that hath wife

and children hath giuen hostages to fortune; for they are impediments to great enterprises, either of virtue or mischief. (妻子ある男は運命に人質をあずける、良いことであれ悪いことであれ大なる仕事に障害となるものだからである) と言っている。この前半 He that has a wife and children has given hostages to fortune. が諺として用いられる。妻子ある男は独身者ほどには大たんにはなれないものである。「妻子は三界の首かせ」である。ペイコンはまた同じエッセイの中で、Wives are young men's mistresses; companions for middle age; and old men's nurses. (妻は青年の愛人であり、中年では友であり、老いては世話をしてくれる人である) と述べているが、これは妻帶者には救いである。諺には独身生活を賛美するものがある。それは、A single man has all the pleasures, and none of the pains of marriage. (ひとり者には楽しみばかりで結婚の苦しみは何もない) と He travels the fastest who travels alone. (ひとりで旅をする者がもっともはやく旅をする) である。後者は、一人旅はわざらわしくなくて早く進める、ということから「旅は道づれ世はなされ」に対応する意味もあるが、野心家は妻子や友人にわざらわされないほうが何事もうまくやっていけるという意味もある。

#### First thrive and then wife.

結婚を成立させる不可欠の条件は何か、諺ではお金である。物質的安定の基礎を欠く結婚は不幸であると断定する。「金の切れ目が縁の切れ目」と言う。love in a cottage (小さな家の愛、つまり、貧しくとも楽しい、つましい結婚生活、ささやかな愛の巣) は諺を語り合っている頃の現実ばなれしたことばかもしれない。諺はいきなり即物的である。First thrive and then wife. (まずもうけそれから妻をめとれ) は、結婚生活を経済的に維持していくようになるまでは結婚は思いとどまれ、と教える。日本では、「1人では食えなくても2人では食える」と若い2人を励ます。イギリスではさらに Before you marry, be sure of a house wherein to tarry. (結婚する前に住む家を確保せよ) と言う。これは妻を住まわせる家を持ち、妻を愛しむ情が生れるまでは結婚してはいけないということである。また嫁取りにはお金がかかるので、とうていその費用を1年では取り戻せないということから、It is hard to wife and thrive both in a year. (1年のうちに嫁ももらい家も繁じようするというわけにはいかない) という諺もある。True love never grows old. (真の愛は老いることなし) とは

言うものの love in a cottage は理想的すぎる。お金があっての愛の巣ということであろうか。When poverty comes in at the door, love flies out at the window. / When poverty comes in at (the) doors, love leaps out at (the) windows. / When poverty comes in at the door, love flies [goes, jumps, leaps, creeps] out of [at] the window. / When the wolf comes in at the door, love creeps out of the window. (貧乏が戸口から入ってくると、愛は窓から出て行く) はまさしく「金の切れ目が縁の切れ目」で、貧困は幸福な結婚生活を破壊するということである。Marriage halves our griefs, doubles our joys, and quadruples our expenses. (結婚は悲しみを半減させ、喜びを倍増させ、出費を4倍増にする) は、結婚生活の長短を簡潔に伝えているが、出費のかさむのが頭痛の種となる。したがって、An expensive wife makes a pensive husband. (女房がぜいたくだだと亭主は考え込む) という結果になる。

#### Choose not a wife by the eye only.

結婚にあたって注意すべきことをさらにつけ加えれば、Keep your eyes wide open before marriage, and half shut afterwards. (結婚前には目をしっかりと見開き、その後は目を半分閉じておけ) と Choose not a wife by the eye only. (外見だけにとらわれて妻を選ぶな) である。Choose a wife by your ear rather than by your eye. (見た目よりも聞く耳で妻を選べ) という諺は、美しい声の持主はふつう人柄は良いと考えられたことから出てきたもので、美しい顔よりも美しい声を持った人を妻として選べということである。もっと拡大して言えば、顔の美しさもよいに越したことではないが、他の要素のほうがもっと結婚生活には大切だし、もっと永続的なものだということである。とかく結婚前は「あばたもえくぼ」に見え、結婚後は「添わぬうちが花」だったと悔んだりする。好機を逸するなかれという意味を持つ諺が多くあるが、そのひとつに Make not a balk [balks] of ground. (良い土地にすき残しを作るな) がある。ところがこの諺の用例中に、長姉をさておいて末妹との結婚を申し出られた時に使われるという解説のついたものがある。この場合長姉はすき残しということになるが、ものごとにはあと先の順序があるということで、結婚でも厄介なことが起こる。女性は時にはぎょう幸に恵まれて、「女は氏（うじ）なくして玉の輿（こし）に乗る」ということがある。A woman of no birth may marry into the purple. である。若くて美しい未婚の女性は、ハンサムな青年が結婚してから自分を大事

してくれるかどうか思い悩んだりすることがある。また、事情あって若い女性を老人と結婚させようとしたりすることもある。このような時に用いられるのが、Better be an old man's darling than a young man's warling [slave]. (青年にきらわれる身〔仕える身〕になるよりも老人にかわいがられる身になったほうがまし) である。若い男は妻から何もかも面倒を見てもらいちやほやされることを望んでいるものであるが、妻は若い夫をちやほやしてかしづいた上にしつこいと嫌われる破目になる。それに反して、老いた男はとかく若い妻を何かといたわり大事にするものである。若い妻と老いた夫との組合せの妙を諺は見抜いていると言える。とにかく、花嫁になる女性は快晴に恵まれた日を婚礼の日にしたほうがいい。諺に、Happy is the bride that the sun shines on. (陽の降り注ぐ花嫁は幸せである) とある。晴れた日に結婚する女性には幸福な結婚生活が約束されている。

#### Every Jack has his Jill.

さて、われわれには「似た者夫婦」とか「われ鍋にとじぶた」という諺がある。うの目たかの目配偶者探しをやっても、とり合わされたものはそれ相応にしつくりいっているのが世の夫婦である。Every Jack has [shall, must have] his Jill. (どの男にも見合った女がいる) は、そのことを示している諺である。There is not so bad a Jack but there is as bad a Jack. (どんな悪い女にも相応の男はかならずいる) というのがある。There was never a Jack but there was a Jill. (相手になる女のいない男はかつていたためしがない) というのもある。また、男女の組合わせには、Let beggars match with beggars. (こじきにはこじきをめあわせよ) が考えられなければいけない。これも人それぞれ相応の相手と一緒にになれということである。There is no pot so ugly that a cover cannot be found for it. (どんなに見にくいくらいでもそれに見合ったふたの見つからないものはない) は、文字どおり「われ鍋にとじぶた」のイギリス版と言えよう。

諺は矛盾だらけである。ものごとを一面から見て真実らしく思われるが、また別の一面から見たものがでてくるとこれも真実らしく思われる。真実らしい2つのものどおしでは矛盾している。そこが諺のおもしろみのひとつである。人それぞれ似合いの相手がいると言っておきながら、Every couple is not a pair. (どのめおとも一対になっているとはかぎらない) というのがでてくる。

(p. 34 へづく)

# FORUM



## 言語感覚教育について

漢文の高校教育の実状を調べて、はたと気づいたことがあります。

例えば「～のみ」と読む助字には「耳、爾、已、而已」などがあるって勿論語感はすべて異なるし、恐らくその「語感」を知っていればその文の醸し出す雰囲気、さらには文体までわかつてしまうのに、これを普通の教師に言わせると「これは限定を表わす助字で『～のみ』と読みます。覚えておけ。」になってしまふのです。江戸時代に学者達が訓読でどれほど苦労していたか、そういう昔の人の苦労話、つまり「語感」に結びつくような裏話は一切しないで、「嗚呼」も「於戯」も「噫」も「嘆」もすべて同じ「ああ」になってしまふのであります。

ところで、これがそのまま「英語」にも当てはまります。一つの単語なりイディオムがその背景に持っている文化性・社会性・歴史性を何も言わないで、「覚えろ」の一点張り、単語も味わえないで、文章など味わえるはずがないのです。國弘氏が「語学の習得は綿密にかつ大胆に」と言われたのは、こういう面での「綿密」を意味していると思います。

「一つの場所に当てはまる最も適

した言葉は唯一つしかない」とは常識(?)だと思いますが、この単純な理屈が全く無視されているのです。この理屈を実感をもって納得するには、「語感」を知るしかないと思います。

訳語に拘泥するより、その「語感」を知ることにエネルギーを使えば、文脈の中で言葉をとらえ、自ずから、生きた文章がつかめるのであります。そういう段階を経て「日本語の未熟なこと」に気づき、日本語に対する姿勢も変わってくると思います。

今の世の中はやはり「本音」は吐けないのでしょうか、あるいは教師は出し惜しみをしているのでしょうか。邪推すれば、少數の例外を除いて、「語感」そのものに頗る関心を抱いている教師はあまりいないのではないかでしょうか。天才(?)は別として、「語感」に関心を抱いている人は日頃の心構えが違うのであります。また多読と精読を兼ねてやらねばならない（どうしてもやってしまう）ことは言うまでもないことで、少なくとも学校の授業では「言葉の持つ重み」とか「ある場所におけるある言葉の持つ必然性」などの話を多極的にすれば、後の仕事（勉強）は自分でできると思います。

「ちがいのわかる」人になるのなら、人間に与えられた最大の特徴の一つである「言葉」の微妙なニュアンスの違いのわかる人になってほしいと思います。地理的・歴史的にみて日本人は言語の習得にハンディがあるとしても、今の若者にそれが及ぼす影響は皆無であって、それを理由にすることはもはや許されないとと思うのです。どんなに外国語に達者な人でも、生まれた時は全く知らなかつたし、一夜にして自家薬籠中の物にしたというのでは決してないの

です。集中的に意欲をもった苦労(?)を経てある段階に達し、それからは、自分にとって日常茶飯事のごとく brush up されていくと思います。本誌の夏季号(1975)でも鈴木孝夫氏が言っておられるように、「本質的にはある目に見えない線を越さなければやらないのと同じ」になってしまうのです。その手段としての英々辞典とのめぐり合いなどは必然的であって、ただ「英々辞典を使いなさい」と教師が口先だけで言うのとワケが違うのです。高校生といえば理屈のわかる年頃だから、説明の仕方で学問的に英々辞典を使う理由もわかるし、さらに英和辞典に對して全面的な信頼をしてはいけない理由（例えば、スピーチレベルの不正確、訳語はあくまでも最大公約数であることなど）も自然とわかってくるのではありませんか。

アメリカにおける日本語教育あるいは中国語教育をみてみると「教育によってその目的が可能である」というアメリカ人の教育観が出ています。池田摩耶子女史が『日本語再発見』の中に興味あることを書いておられます。

…アメリカの学生には、「虫が鳴く」ことについて一時間もかけて説明しなければならないという問題が起こるのである。…

日本で、どうしてこの逆のことが起こらないのでしょうか。例えば、logrollingについて、一時間も説明してくれる教師がどれほどいるのでしょうか。

もっと生徒に知的好奇心を起こさせるために、例えば國弘氏の最近の著書である『アメリカ英語の婉曲语法』とか『現代アメリカ英語』、小林祐子女史の『身ぶり言語の日英比較』をテキストに使ったら（教師が笑感をもって説明するという厳しい(?)

条件がありますが), 英語, さらには言語に対する関心は, 以前よりずっと出てくると思います。

『ニュースウイーク』誌にまで取り上げられるほど国際化(?)している日本での英語教育を, 様々な具体案とは違った局面(あるいはそれ以前に潜在している問題として)から, 考察してみましたが, やはり言うべきことであると思います。語学教育の前に語感教育を。

(加藤淳一)

### 森常治氏への反論

『英語展望』52号の森常治氏による「<英語有限視思想>の奨め」は非常に面白かった。頷ける点も多く流石『諸君!』誌上で英語と English の違いを指摘された教授らしく, 哲学的角度から外国語習得へアプローチするという見事な「国際展望」だと考えた。しかし乍ら氏の前半に於て英語をライオンに譬え, 襲われた縞馬的, しかもノイローゼにかかっている英語学習者はあたかも本誌50号の投稿者に代表されるというような筆運びをされている。この氏によって非国際的立場へ代入された投稿者こそ小生自身なのである。そこで森氏はいうまでもなくマトモな英語学習者に対しても誤解をとくために一文を呈したい。

小生が投稿の中で言わんとしたことは, 次のようなことだった。外国語をマスターするとはどんなに困難なことか; 生徒は言うに及ばず教師だっていつも四苦八苦している。こうした現状に平泉氏が日本人の約5%にだけ英語を教えようと提案された。小生勤務校の実状などから判断して賛成できる面も多分にあった。

内心では小生の投稿時は50%ぐらいになつたら少しまトモな英語教育も可能なのでは, などと考えていた。しかし英語を「実際ににおける活用の域に達せ」られる教育者の続出により日本の英語教育に革命が起きるなら, 各種学校卒の人にも教員免許を与えればよい。だが, 英語を活用できるなどとは英語学習の一部であると思った。まして高度な技術や歳月を要して達せられる読書と比較した場合などは, そこで小生は絶対に憶測から書いたのではなく, 20年ぐらいの間に接した人や話に聞いた人の中で speaking に優れた人々のことを思い出してみた。森氏の言及されている國弘氏でもよい。その他, 萩原恭平氏, 松本亨氏, 東後勝明氏等。しかし私が信じるにはこうした先生方に共通することは先ず, 度胸があり, 物マネがうまいことだ。五十嵐新次郎・松本・萩原・東後各氏の物マネがうまいのは定評があった。

また良い意味でも変わっている所があるといえよう。学生時代の松本亨氏が目覚まし時計を止めた瞬間から英語でしゃべり, 考え続けたこと。國弘氏が絶えず只管朗読をしていた頃のことを回想してお母様が「あのときのあんたはなにかに憑かれたようだった。」(開隆堂『英語教育』Vol.26, No.5, p.3)と言われるということ。どれもこれも変わった生活をされたのだ。

以上の大先生方は勿論人格者であり, 英会話がうまくって問題はない。ところが小生の大学時代の ESS 会員などを思い返すときソッとする。英語をしゃべれるぐらいで大学生の本分を果したような態度を見せたり, 大勢の面前で男子米人教師にベタベタ近づいていくふしだらにさえ見える女子学生がいたり, よく外人の言うことが分からぬくせに

Yeah, Uh-huh! の連発をさせるのがいたり, 山手線の中では静かなお客様の前で日本人同士であることも忘れて, 下手な英語でしゃべり, 大笑いをするずうずうしさ——など。しかもこの現象はよその大学の ESS に於ても全く同じだった。ところが皮肉なことに, こうした精神構造の人間がみるみる会話に上達するのであった。但し会話にのみであった。こうしたタイプの大学生とは英字新聞さえ読むのが不得意だったり, 厚い本などに到っては読破する意欲などは更々見られないのも屢々だった。以上のような体験からこそ「私の経験では, 日本人で英会話がうまい人というのは, 少し変わったところがあったり, 変に度胸があったりする者が多い。…静かに悩む生徒と語り合うようなタイプの教師には, しゃべることが下手な人が多いのかもしれない」と書いたのだった。しかもしゃべることが下手な教師はそのかわりに読書家が多いことを言ったつもりだった。ところが森氏は自分の「外国語に対する構造的把握」に内容を無理に合わせようと小生の文から都合がよくなるようなところのみを引用されたとしか思えない。しかも小生の考え方を「それこそ○×式思考ではないか」とまで言われた。とんでもない引用のされ方になったものだ。ただ一つの救いは「もちろん投稿氏の気持もわからぬではない」だけである。前述『諸君!』誌上「語学教師「勇気ある別居」の奨め」でもそうだが, 氏はどうも A か B の二者択一的結論をされるようだが, 少し C 的思考も必要なのではないか? さもなくば英語と English を混合させる同時通訳という学問はどう説明されるのか?

(山形県立酒田北高等学校教諭  
斎藤造酒雄)

## 『人類への一里塚』

永井道雄著

日本放送出版協会刊、四六判、256pp.、¥900

OGAWA YOSHIO  
小川芳男

—昨年アメリカの留学生問題の協議会に出席した際、東南アジアからの留学生の一人が帰国すると刑務所に行きだというショッキングな話をしたことがある。本書の中で著者は留学生の強いられる緊張状態を、compulsive conformity 「強制的順応」と compulsive alienation 「強制的離反」という言葉で巧みに表現している。このような矛盾を理解することなしに留学生問題を論じることはできない。

本書は副題が「文化交流と教育改革」となっていることで明かなように、文教行政の最高責任者としての著者が、教育改革は文化交流からという信念に立って、主として文相就任以来発表した論文集である。第一部は学生問題と文化交流の問題が論じられているが、developing countries の学生が developed countries へ留学するとき、その目的や効果は、単に一方的に学ぶことではなく、give and take 「相互交換」であるという基本的な姿勢が強調されている。留学生に教えるばかりでなく、留学生から学ぶことの意義が大きいのである。また Europeanization や Westernization のみが文化を高めることではないという鋭い指摘がある。言語と文化、言語と国家の不可分性に関しては、初代文部大臣森有礼の英語を国語にしようとした経緯がわれわれに反省を強いる材料を提供している。留学生問題というと、わが国では宿舎のことがしばしば話題にのぼるが、多数の留学生を一か所に住ます寄宿舎のようなものは、国内に留学生の colony を作るようなもので、host country の人々との交流を妨げると共に、言語習得の邪魔にもなることは、われわれの日常経験するところである。言語も大切であるが眞の交流は心の交流で、「外国语も大切だけれども、もっと基本的な人間の生存の情況についての認識、それから私たち自身が背負っている過去についての認識が必要だと思うのです。(60頁)」とあるのは、留学生問題に関するものの、肝に銘じておくべき言葉であろう。

第二部は主として国連大学のために多くの頁が割かれている。单一の言語、单一の民族で永く孤島に独立を保ってきたわが国にこのような大学ができるとの意義は大きい。著者も新しい世界の平和のために、そしてまた人類の未来のために情熱を傾けている。しかし日本の国民性として、日本にできれば日本の大学だという誤解または錯覚をもちがちである。名古屋大学のプラズマ研究所や東京外国语大学のアジア・アフリカ言語文化研究所などをみても、共同利用の実は必ずしも上っていないうらみがある。国連大学は文字通り世界の大学である。これに理解協力できるか否かは、教育改革がどの方向に進むかを決定する。日本人にとって、一つの試金石であろう。

第三部は親しみ易い essay 風のもので読み易く個人的な説得力がある。その中で特に強調されているもの一つに、試験地獄の解消がある。しかし学者で評論家の著者は、一挙に解決ができるなどと大言壯語しないで、一般社会の理解と協力を求めている。そして文相の言葉としてすでに有名になった八岳説が展開されている。評者も、入試の改善が教育の改善の最も重要な部分であると考えているので、著者の考えが一日も早く実現することを急いでやまない。

最後に一言、第三部のはじめに「自己への造反」が語られているが、もうこの辺りで造反をきりあげて、じっくり腰をおちつけて教育の改革にとりくんで貰いたいものである。教育の改革は一朝一夕にはできないというのが著者の考え方であるから、なおさらである。

(東京外国语大学名誉教授)

### ELEC 特別講演会

► 7月26日（月）1：30～3：30

「現代英語のヴァイタリティ——若者のコトバと意識——」

明治大学教授 堀内 克明

► 7月29日（木）、30日（金）1：40～3：10

“Case Study”

カリフォルニア大学教授 Charles J. Fillmore

► 8月13日（金）1：30～3：30

「英語の論理——ロジックは冷たいか——」

比較発想学研究家 松本 道弘

会場はいずれも ELEC 英語研修所講堂で入場無料。詳細については、〒101 東京都千代田区神田神保町3の8 ELEC 英語研修所 (Tel. 265-8911) にお問い合わせ下さい。



## 『英語諺辞典』

大塚高信・高瀬省三編  
三省堂刊, A5判, viii+1, 110pp., ¥6,500

TODA YUTAKA

戸田 豊

待望久しき諺辞典の出現である。諺に関する書物はこれまでにわが国になかったわけではないが、いずれも本格的なものではなく、諺集の域を出るものではなかった。また、英和辞典などにおける扱い方も、表面的であり、つけ足し程度のものであった。

ことばへの関心が高まっている今日、かかる体系的、学問的労作が編まれた意義はまことに大きい。この辞典は多くの点で特色を持っているが、その最大のものは、諺の意味・用法の解説が詳細をきわめていることである。第2の特色は起源・出典が可能な限り記載されていることである。第3には、英語文献への初出の時期が明記されていることである。

諺の意味・用法の解説について触れてみよう。これまで出版されている諺集の類や英和辞典においては、單に訳文を載せる程度の扱い方しかしていないが、この辞典では、それぞれの諺の持つ figurative な意味や、どのような場面で用いられるか、などが記述されている。英語を常用とする人々にとっては自明のことであっても、語系語属を異にする国民にとっては、日本語訳はできても、意味・用法は不分明といった諺が多い。この辞典の意味・用法の解説が綿密であることの拠つて来るところは、それぞれの諺の用例を子細に点検することにあったと容易に推測できる。F. P. Wilson, *The Oxford Dictionary of English Proverbs* (1970), M. P. Tilley, *A Dictionary of the Proverbs in England in the Sixteenth and Seventeenth Centuries* (1950) などの諺辞典の用例を通して得られた知識に基づく解説である。

具体的に例を挙げてみよう。Beggars breed and rich men feed. は、どの英和辞典でも、「金持の食い道楽、貧乏人の子だくさん」となっているが、この諺辞典は、「(乞食は子供を生み金持は養う)。貧乏人の子は金持に仕えて食べて行くの意」となっている。これは、James Kelly, *A Complete Collection of Scottish Proverbs* (1721)

の Poor Peoples Children find a Support in the Service of the Rich and Great. に基づいている。また、とかく問題になる It never rains but it pours./A rolling stone gathers no moss./Children (or Maidens) should be seen, and not heard. などにも明解なコメントが付いている。諺が2つ以上の意味を帯びている場合についての言及もある。A569, B107, B169, H1528, J2, M463, N26, N52, N154, N337, O416, S67, S234, S290 などである。

なお、どういうわけか解説のついていない諺が散見される。例えば、An ill weed grows (or Ill weeds grow) apace (or fast or well). には、gibe at a tall or fast-growing child (COD)/bad things spread quickly and far (V. H. Collins, *A Book of English Proverbs* (1959)) といった注を参照して欲しかった。また、Never is a long day (or term or word). に対して、「(Neverは長い日である)。「もう決して…ない」などとはめったに言わぬことの意」とあるが、これだけではどうしてそういう意味になるか分からぬのではなかろうか。The exception proves the rule. にはくわしい解説があるが、どういう場合に用いるのかが記されているともっとおもしろい表現となる。これについては、大塚高信博士の『英語研究』創刊50年記念号 (1959) に載せられた論考を参照されるとよかったですと思われる。

出典・起源の解説は、独・仏・伊・希・羅などの他国語に由来するものについてはその原文、訳、解説、聖書・イソップ寓話・マザー・グースへの言及・解説、時代風俗・風習についての解説などから成っている。

英語文献への初出時期が記載されているが、時代背景が分かるような気がして有益である。記載洩れと覺しきものがざっと数えても50を下らない。また、この辞典の参考文献に入っていない B. J. Whiting, *Proverbs, Sentences, And Proverbial Phrases From English Writings Mainly Before 1500* (Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press, 1968) を利用すれば、初出時期に修正を要するものもでてくると思う。

なお、この辞典の3分の1は索引であり、それだけ利用価値を高めていることを付記しておきたい。

The proof of the pudding is in the eating. という、英語に関係する人が座右に置いて親しむべき貴重な一本である。  
(静岡県立清水東高校教諭)



## 新刊紹介

### ★『生成文法の意味論研究』

ノーム・チョムスキー著  
安井 稔訳

本書は Noam Chomsky, *Studies on Semantics in Generative Grammar* (The Hague: Mouton, 1972, 207 pp.) の全訳である。「名詞化管見」「深層構造、表面構造、意味解釈」「変形文法理論における経験的問題」の3編から成る論文集である。第一論文では統語素性を利用する「語い論的仮説」の妥当性、第三論文では統語論を基礎におく深層構造の妥当性、第二論文では深層構造における文法関係は意味解釈に関し基本的なものであるが、ある種の意味では表面構造の情報が必要である、という意味解釈理論の精密化のための修正を提案している。要するに、チョムスキーは、本書で、自分の立場を主張しているのであるが、自分の理論を座標軸にして、生成意味論、格文法を批判しながら、変形文法による意味論を概観している趣旨がある。

書評子は、大学院の授業で、原書を使用する機会があったが、論文には部分的に、複数の解釈を許す、著者の意図のはっきりしない箇所があり、そういう箇所で、訳者は一つの見識ある訳を選択しているし、本訳書では訳者の説明が（角括弧の形で）本文中に挿入されるなどの工夫がこらしてあるために、原書を読む際に傍において参照すると、参考になる点が多い。巻頭に付けられた「訳者のことば」は、変形生成文法の意味論の知識を整理するのに役立

つし、巻末の Errata は貴重である。人名索引と件名索引は原書のより詳しくなっており、原書にない主要語句索引と規則索引が新たに付けられていて、訳書の存在意義を一層高めている。素晴らしい訳書の出たことを心から喜ぶ。

(研究社刊, A 5 版, XIX+299 pp.  
¥2,500)

(東北大学助教授 桑原輝男)

### ★『アメリカ英語の発音』

J. S. ケニヨン著  
竹林 滋訳

アメリカ英語を勉強したい者にとっての必読書の中に J. S. Kenyon の *American Pronunciation* (George Wahr, 1951) が入る。この本はもともとアメリカ人の英語教師や学生にアメリカ英語の発音の歴史的背景を明らかにすると同時に、ありのままの記述をして、発音についての間違った考え方を正すことをねらったものであるが、外国人である我々がアメリカ英語の発音を知りたい時にも、Kenyon-Knott の *A Pronouncing Dictionary of American English* (G. and C. Merriam, 1949) と共に良く参照にする文献である。

1924年初版で、訳は1951年の10版によっている。言葉は時と共に変化するので、この本の記述の中には多少古めかしい所もあるが、訳者は巻末に30頁に及ぶ詳しい註を付けて、その後の研究の結果を紹介し、随所に独自の見解を示してくれる。

又訳者は(1)原本の章の区切りの分かり悪さを改善したこと。(2)発音記号だけで分かり悪い所には綴字表示を添えたこと。(3)原本の誤りを訂正したこと (cf. p. 67 *nidənt*, p. 150 *Mod. Language Notes* 等, (4)参考文

献の追加 (pp.271-276), (5)発音記号対照表 (特に Jones 式に慣れている日本の読者には有効), (6)日本語の事項索引, (7)英和用語対照表を添えるといった工夫をしている。

この本は良く D. Jones の *An Outline of English Phonetics* (W. Heffer & Sons, 1918, 1960) のアメリカ版といわれる。しかし書かれた目的が違うため、この本はいわゆる分節音素中心の記述のため、外国人教師には画龍点睛を欠く感がないわけではない。しかしこのアメリカ英語の発音に関する古典的な本書が訳出されたことはこの分野に興味のある者として大変嬉しい。

発音記号が多く、大変な仕事の割に誤植はほとんど無い。凡例の LM = Late Middle English は Late Modern, p. 22 14 ə→ə, p. 24 contact. kan→kan, p. 26 Bostonian は原本も違うが i→ɪ, p. 63 feel [ɪ] →[i], p. 243 England→English 等 (大修館刊, A 5 判, 328pp., ¥1,600)

(青山学院大学教授 牧野 勤)

### ★講座・新しい英語教育 第1巻

#### 『新英語教育論』

中島 文雄監修

講座・新しい英語教育 1『新英語教育論』(大修館)は、全3巻のうちの第1巻である。本書を読んで痛感することは、英語教育とは、英語ができれば教えられるなんて、簡単なこと、なまやさしいことではないということである。大学等で教科教育法を学び、せいぜい指導要領ぐらいをかじっておけば、教科書片手に無事1年を送れるなどというものではない。

これから日本における英語教育は、先輩の辿った道をふりかえり、

もっと広い視野に立ち、多角的に他の関連諸科学との協力、また、言語と文化・社会などの関連で英語教育を考えて行く必要がある。さらに、心理学を英語教育にどう役立てるかという問題もある。日本という单一民族、单一言語国という観点からすれば、母国語である日本語も英語教育では無視できない大きな要因といえる。また、本書では、学習者に視点を置いて、英語の学力の問題、外国語学習の適性、知能、学力不振児の研究、そして、能力差、個人差などをとり上げ、学習の本質をとらえている。そして、後半では、カリキュラムと教科書、中・高・大における英語教育の目標と内容、早期英語教育の問題と方法なども扱っている。

本書は、17のテーマが17名の著者によって書かれているが、もともと数年前、日本短波放送で1年間放送された英語教育講座の放送内容が中核となってまとめられたものである。そのために（そのまま活字化したものではないが）ポイントをとらえた平易な表現で読みやすく書かれている。ただ、これだけの内容のものを限られたスペースでは、到底書ききつせるものではなく、全体にさらりとした感がないでもない。監修の中島文雄氏も「これから英語教育を考えていく基礎となりうることを目指したつもり」と述べているが、とくに中・高校で、何年か実践をした教師には、ぜひ一読をすすめたい本である。

(大修館刊、A5判、Xi+277pp.,  
¥1,800)

(東京学芸大学付属竹早中学校教諭  
下村勇三郎)

## ★『英語事始』

日本英学史学会編

『蘭学事始』はだれでもが一度は目を通したことがあるにちがいない。われわれの先人が、外国の文物を移植する上にどれほど心を碎き、肉体を労したかの記録は、すべてに恵まれすぎた感のあるお互いに、はじらいとある種の罪悪感をすら強いる。

これはその英学版である。

執筆者は、日本英学史の専門家として令名の高い方々のオールスター・キャストといってもよく、上野景福、大村喜吉、高梨健吉、速川和男、吉武好孝など、ひごろ英学生にも親しい大家中堅研究者が、それぞれ専門の領域について健筆を振っておられる。それだけでこの本の価値は高いといってよい。

しかもこの本をさらにユニークにしているのは、英語英文学以外の広義の英学関係者にスペースを提供している点である。たとえば中国文学のさねとうけいしゅう教授が「漢語と西洋文化」ほかを、政治文化論そ

の他でユニークな論陣をはっておられる芳賀徹教授が「東の志士と西の文人の邂逅」を、また科学史の渡辺正雄博士が「自然科学の攝取とその学術用語」ほかを寄せておられるなどはこれである。山川菊栄女史——まだ豊饒としておいでの方はめでたい——が津田英学塾を回想しておられるのも楽しく、かつ有益である。日本の英学が、英語学や英文学に極限される以前の大らかさと広い視座とを、問わずがたりに教えてくれるからである。

図版や写真が多く、かつ珍しいものであることもこの本を楽しい読みものにしている。高度にアカデミックに精微化する一方では、大衆文化や風俗の一環を形成するなど、英語がますます一般化し、書斎派と「実用」派との乖離が拡がりつつある今日このごろだけに、先人の劳苦を思い、その高い志操に触れることは、まことに時宜を得た作業といえるだろう。本書はその目的を十二分以上に果たしてくれる。

(エンサイクロペディア ブリタニカ  
刊、B5変形版、316pp.、¥3,500)

(国際商科大学教授 國弘正雄)

## ►国際社会と日本文化を総合的に考える

# 英語展望

合本(1972~'75)

アメリカの目指したもの 本間長世 平均的アメリカ人

猿谷要 ウォーターゲートをめぐって 國弘正雄

日本文化の国際性 國弘正雄/K. パトナー/山本正/外

山滋比古/斎藤襄治・武田勝彦・貝瀬千章

オーラル・アプローチ再評価 安井稔/伊藤健三/山家保

国際化時代の英語教育 外山滋比古/中村敬/若林俊輔

身ぶり言語 小林祐子/西山千/今村茂男/中野道雄

★最寄りの書店にお申し込み下さい。

¥6,000

## 新刊案内

『草の根アメリカ——ニューヨーク・タイムズの米国探訪』 G. ロバーツ／D. R. ジョーンズ編, 波多野裕造訳  
B 6 判, 249頁, 980円 サイマル出版会

世界中から集まってそれぞれの国民性を示しながら雑居し, それでいていかにもアメリカ人としかいいようのない生活をしている人々(ニューヨーク裏通りの移民たち), 若い女子教師が一人で教えている山間の学校の話(テネシーにかかる新しい橋), よく知られている“Wabash Cannon Ball”の歌のイメージとは程遠い, ポロボロの貨車1両と色あせた2両の客車を連ねた廃止寸前のローカル鉄道のこと(ワバッシュ弾丸列車の音絶えて), また映画『アメリカン・グラフィティ』などで紹介されている高校生活最後のダンス・パーティー(卒業前の忘れぬ夜)などニューヨーク・タイムズの片隅に載ったさりげない記事篇を, 変わらざるアメリカ, 消えゆくアメリカ, 変貌するアメリカ, とまどえるアメリカ, 生まれ変わるアメリカ, の5部に分けてアメリカのイメージを浮き彫りにした興味深いレポート。

『カリフォルニア日記——ひとつの文化革命』 エドガール・モラン著, 林瑞枝訳 B 6 判, 295頁, 1,800円  
法政大学出版局

1969—70年にかけてカリフォルニア州サン・ディエゴの生物学研究所に招かれたフランスの知識人が, 古典的教養と物質文明の双方に不満と反発をもつ視点からアメリカの若者文化, ベトナム戦争, 環境汚染等について日記風に述べた人間と文明についてのエッセイ。

『A. トフラーの未来教育』 A. トフラー編著, 德山二郎訳 B 6 判, 305頁, 1,500円 実業之日本社

“過去意識”に支配されてきたこれまでの教育に決別し, 高度産業社会に必要な専門分野を超えた広い視野と適応性に富んだ人間教育のために, 未来意識の導入と行動学習の拡充を主張し, 新しい価値観にもとづく大胆な教育の改革を提唱する論集。

『留学試験にでる問題』 梶田一郎, 角田史郎他著 新書判, 225頁, 650円 英潮社

留学に際してアメリカの大学から要求される英語能力テストとして TOEFL (Test of English as a Foreign Language)が最もひろく用いられている。その模擬試験問題を4セット収め(ただし Listening Comprehension は同社刊『TOEFL ヒアリング試験にでる問題』にゆずっている), あわせて留学に関する実務知識を簡潔にまとめている。

『知識と自由』 ノアム・チョムスキ, 川本茂雄訳  
四六判, 188頁, 1,300円 番町書房

変形生成文法の創始者であり, 政治的活動家としても知られている著者が, パートランド・ラッセルの哲学者として追求した人間の知識の問題と, 反戦運動家としての政治的信条の根底にある人間の自由の問題とを総合的に論じ, 現代における知識人の役割を示唆した2つの連続講演を収録し, 訳者の解説を付す。

『言語学と新しい教養』 P. H. リヴィエール／L. ダンシャン著, 谷口勇訳 A 5 判, 197頁, 1,800円 芸林書房

言語学を一つの専門分野としてよりは人間本性の全的理的理解のための最も重要な基礎学問としてとらえ, その視点からソシュールとチョムスキに焦点をあてて平易に述べている。

『入門変形文法——歴史・理論・演習』 J. T. グリンドー／S. H. エルジン著, 鑑木英津子訳 A 5 判, 331頁, 2,200円 ごびあん書房

予備知識をもたない人を対象に変形文法のエッセンスをわかりやすく述べた定評ある入門用教科書の翻訳。「なぜ言語学を学ぶか」(第1章)という基本的な間に答えることからはじめ, 変形文法理論の特質と要点をていねいに説き, 理解を徹底させる練習問題を収めている。

『英語学大系 14 言語学史』 興津達朗著 A 5 判, 267頁, 1,900円 大修館書店

前半で古代ギリシアから19世紀に至る西洋の言語学研究の流れを各時代の特色を包括的にとらえて示し, 後半ではソシュール以後ヨーロッパ大陸, イギリス, 北欧の諸言語学派, アメリカ構造言語学, チョムスキ等代表的な言語研究の方法および言語に対する考え方をまとめている。

『Essays in Cultural Criticism』 高橋源次著 A 5 判, 238頁, 2,300円 英潮社

マシュー・アーノルド, T. S. エリオット等7人のイギリスの文学・文明批評家の考察を通じて近代精神の特質とそのゆくえを探る英文論集。

『実存主義と現代文学』 D. D. マッケロイ著, 松浦直己／上村哲彦訳 B 6 判, 156頁, 1,500円 愛育社

現代の危機を集約的に示している文学作品として T. S. エリオットからカ夫カ, オーデン等をとり上げ, 実存哲学, 精神分析, カトリック思想との関連で現代における生の問題を提起。



### ►第1回 ICU 言語科学夏季講座

期日 7月17日(土)～8月1日(日)

会場 国際基督教大学

会費 参加費 ¥2,000；授業料 ¥20,000

詳細については 〒181 東京都三鷹市大沢3の10の2  
国際基督教大学語学科あて問い合わせられたい。

### ►Fillmore 博士公開講演会

日時 7月24日(土)午後2時～4時

会場 中野サンプラザ5階カトレア1

会費 ¥500

問い合わせ先 〒162 東京都新宿区揚場町15 セント  
ラルコーポラス108 大学英語教育学会

### ►Fillmore 博士を囲む現代言語学特別セミナー

日時 7月16日(金), 17日(土)午後2時～5時

場所 上智大学7号館特別会議室

会費 ¥3,000

問い合わせ先 〒162 東京都新宿区揚場町15 セント  
ラルコーポラス108 大学英語教育学会

### ►中学生のための特別英語講座

会期 8月16日(月)～20日(金)

会場 ELEC 英語研修所

講師 國弘正雄(国際商科大学教授)他数名

定員 200名

詳細については 〒101 東京都千代田区神田神保町3  
の8 ELEC 英語研修所「特別英語講座」係あて問い合わせられたい。

### ►第6回イングリッシュ・ギャラクシー

会期 8月16日(月)～19日(木)

会場 東京都八王子市大学セミナーハウス

会費 ¥30,000

対象 中学・高校・大学・一般

申し込み、問い合わせは 〒107 東京都港区赤坂2の  
17の69 ムトウコーポ302 トニー植松語学センター  
(Tel. 585-9330) まで。

### ►ELEC 創立20周年記念英語教育研究大会

創立20周年を迎えたELECでは、記念事業の一環とし

て11月6日(土)に Brown 大学の W. Freeman Twaddell 教授を招聘し、記念講演を予定するとともに、北海道、九州地区等においても同教授の記念講演を計画中である。

### ►ELEC 研究グループの発足

ELEC では、創立20周年を機に3か年計画による ELEC 研究グループを5月7日に発足させた。研究委員長には東京教育大学教授太田朗氏があたり、研究員には以下の諸氏が委嘱された。

### ＜教材・教授法研究＞

伊藤 健三 立教大学教授

下村勇三郎 学芸大学付属竹早中学校教諭

渡辺 益好 埼玉大学講師

伊藤 元雄 横浜市立桜丘高校教諭

### ＜評価・入試問題研究＞

大友 賢二 神奈川大学助教授

島田 昌幸 職業訓練大学助教授

石井 敏 大妻女子大学講師

浅野 紀和 神奈川大学講師

伊藤 嘉一 東京教育大学助手

### ＜情報・資料収集および分析研究＞

若林 俊輔 東京学芸大学助教授

### ►ELEC 人事

去る4月2日に開催された ELEC 第35回理事会において、次の3氏が評議員として新たに選出された。

光明照子(東京女子大学短期大学教授)

村田聖明(ジャパンタイムズ常務取締役)

吉田 正(ソニー理事)

### ►ELEC 賞研究論文・実践記録の募集

ELEC では、わが国の英語教育の水準向上、あるいは英語教授法の改善に直接役立つ実践研究を奨励する目的で、「研究論文」または「実践記録」を広く一般に募集している。締切は9月末日。

英語展望 (ELEC Bulletin)

第54号

定価 480円(送料 120円)

昭和51年7月1日 発行

◎編集人 中 島 文 雄

発行人 酒 井 杏之助

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 ELEC 出版部(財団法人英語教育協議会)  
東京都千代田区神田神保町3の8

電話 (265) 8911~8916

振替 東京 3-11798

# ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC